

中尾・天神遺跡

—埋蔵文化財発掘調査報告書—

1980.3

長野県南信土地改良事務所
長野県飯田市教育委員会

中尾・天神遺跡

—埋蔵文化財発掘調査報告書—

1980.3

長野県南信土地改良事務所
長野県飯田市教育委員会

序

県営畠地帯総合土地改良事業として今回飯田市下久堅地籍に大原北ノ原工区を設定し、農業近代化をはかるため区画整理及び散水施設工事(75.4ha)が実施されることになりましたが、かねてよりこの地帯には住居址等、埋蔵文化財の存在が確認されており、文化財保護の見地から工事の実施に先立ち、飯田市教育委員会に委託して遺跡の発掘調査を行ったものであります。

今回の調査はたまたま昨年、一昨年に調査をお願いしました伊久間、大原にも接しており両者の関連性も発見確認出来たものと存じます。

報告書が出版されるにあたり、改めて文化財保護、記録保存の重要性を認識するとともに、昨年に引き続き終始ご熱心に調査を指導実施された、佐藤団長先生はじめ関係各位のご努力に敬意を表し厚く御礼申し上げる次第であります。

昭和55年3月

南信土地改良事務所 下伊那支所長

八 輜 高 吉

例　　言

1. 本書は昭和54年度県営畠地帯総合開発小波地区 大原・北原工区計画に伴う、中尾遺跡・天神遺跡発掘調査報告書である。
2. 本書は報告書作成の期限があり、このため調査結果については充分な検討・研究がなされず、資料提供と問題提示の報告書となっている。
3. 本書の編集・執筆は佐藤が担当した。
4. 写真は佐藤が、遺構実測図作成は佐藤・牧内が、遺物の作図は佐藤が、遺構・遺物の製図は田口が分担した。
5. 遺構実測図のうちピット内または横の数字は床面からの深さをcmで、遺物出土状況は床面からの高さをcmで（床面出土は数字を略す）あらわし、縮尺は図示してある。
6. 遺物は飯田資料館に保管してある。

目 次

序	3
例 言	4
挿図目次	6
I 環 境	7
1. 自然的環境	7
2. 歴史的環境	10
II 発掘調査経過	11
III 調査結果	15
(I) 中尾遺跡	15
1. 住居址	15
(1) 繩文早期末	15
(2) 繩文晚期	17
2. 焼土帯	23
3. 土 坑	23
4. 溝	24
5. 遺構外の遺物	25
(II) 天神遺跡	28
1. 住居址	28
(1) 繩文中期中葉	28
(2) 繩文後期	31
2. 土 坑	32
IV ま と め	34
遺 物 図	36
図 版	43
中尾遺跡	
天神遺跡	
発掘スナップ	
付 小林神社前遺跡立合調査報告	56
調査組織	57
おわりに	58

挿 図 目 次

図1 中尾・天神遺跡・小林神社前遺跡位置図及び周辺主要遺跡分布図(1:30,000)	8
図2 中尾・天神遺跡地形詳図(1:10,000)	9
図3 中尾遺跡遺構分布図	14
図4 中尾遺跡1号住居址	15
図5 中尾遺跡3号住居址	16
図6 中尾遺跡4号住居址	16
図7 中尾遺跡7号住居址、焼土帯I	17
図8 中尾遺跡2号住居址・溝2号	17
図9 中尾遺跡5号住居址	18
図10 中尾遺跡6号住居址	19
図11 中尾遺跡8号住居址	19
図12 中尾遺跡9号住居址	20
図13 中尾遺跡10号住居址・土坑6号・7号	20
図14 中尾遺跡11号住居址	21
図15 中尾遺跡12号住居址	21
図16 中尾遺跡13号住居址	22
図17 中尾遺跡14号住居址	22
図18 中尾遺跡15号住居址	23
図19 中尾遺跡16号住居址	23
図20 中尾遺跡焼土帯II・溝7号	24
図21 中尾遺跡土坑2号・3号・4号	25
図22 中尾遺跡土坑1号・5号・8号・9号	25
図23 中尾遺跡溝1号	26
図24 天神遺跡遺構分布図	27
図25 天神遺跡1号住居址、土坑1号・2号	28
図26 天神遺跡2号住居址	29
図27 天神遺跡3号住居址	30
図28 天神遺跡4号住居址	30
図29 天神遺跡6号住居址、土坑5号	31
図30 天神遺跡7号住居址	31
図31 天神遺跡8号住居址	32
図32 天神遺跡5号住居址	32
図33 天神遺跡9号住居址	33
図34 天神遺跡土坑3号・4号	33
図35 天神遺跡土坑6号・7号・8号	33
図36 中尾・天神遺跡出土小型遺物	36
図37 中尾2号住居址出土遺物	37
図38 中尾5号・9号・10号・12号・13号・15号住居址出土遺物	37
図39 中尾遺跡14号・16号住居址出土遺物	38
図40 中尾遺跡土坑3号・6号・7号・8号・9号出土遺物	38
図41 中尾遺跡石塙よりの石器	39
図42 天神遺跡1号住居址出土遺物	40
図43 天神遺跡2号住居址出土遺物	40
図44 天神遺跡3号・4号・5号・6号・7号・8号・9号住居址、土坑1号・4号・5号出土遺物	41
図45 小林神社前遺跡地形詳図	55
図46 小林神社前遺跡立合調査検出遺構図	56
図47 小林神社前遺跡1号住居址出土遺物	56

I 環境

1. 自然的環境

中尾・天神遺跡は長野県飯田市下久堅北原に所在する。

飯田・下伊那地方は東に赤石山脈が連なり、西に木曾山脈が聳え、その中間を天竜川が南下してその両側に見事な段丘が発達している。天竜川の東岸 - 竜東地区は背後に赤石山脈の前面に中山性の伊那山脈が大西山(1741m)、鬼面山(1889m)、氏乗山(1818m)、金森山(1702m)となって赤石山脈と並走している。伊那山脈の東面は急峻な断崖をなすが、西面は數列の断崖をもちながら段丘面に達し、天竜川西岸 - 竜西地区に比し山麓からのびる扇状地は狭小で段丘面の幅員も全般的には狭いが豊丘村から喬木村にかけての段丘の発達は著しく、特に北から豊丘村の田村原・林原・伴野原、喬木村の城原・帰牛原・伊久間、さらに飯田市下久堅の中尾・庚申原と続く伊那谷中位段丘面の幅は広く典型的な段丘地形を形成している。

中尾・天神遺跡の北は境ノ沢を境に喬木村となり、境ノ沢の浸蝕崖は天神では高さ50m、中尾では西端部で25m、東側の大原段丘崖下では浅い谷となっている。中尾は境ノ沢の谷をはさんで、北に伊久間原があり、同位段丘面にある。標高480m~490mを測り、中央部に境ノ沢の支流による浅い浸蝕崖によって南北に分かれ、北を大中尾、南を中尾と一般的に呼んでいる。今次調査は大中尾地籍を主としたもので、約東西200m、南北200mの扇状地形をなす台地で西崖端部中央に境ノ沢の小支流による崖端浸蝕の抉りこみがある。

中尾地籍は東西400m、南北150mの平坦な台地をなし、乳牛と豚の飼育団地となっている。中尾段丘端から比高差20mの緩い傾斜をなす段丘崖となって天神面となる。天神は南北140m、東西120mのやや北に傾く平坦な台地をなし、境ノ沢を隔てた北は同位段丘の伊久間原下原面があり、標高460m~463mを測る。中尾では北から西にかけてと、天神の北側は境ノ沢の深い浸蝕谷に切られ、天神の西は急峻な段丘崖となって天竜川の氾濫原と落ち、天竜川との高さ80m前後であり、段丘崖下には僅かに残る冲積段丘面があって県道252号下久堅知久平線がとおり、弁天橋周辺には道路をはさんで家が並ぶ。

南は西側では40m、東側で15m前後の比高差をもつ岩ノ沢の浸蝕崖となり、谷間に帯状に水田が段をなして並んでおり、その南は庚申原となる。それ以南は小河川の浸蝕により段丘面は狭小となる。東は約60mの高さをもって高位段丘の大原台地、さらに高位の伊那谷第1段丘の机山(610m)の残丘となる。その背後は九十九谷と呼ばれる深い浸蝕崖となり、さらに伊那谷よりなる丘陵が東にたかまって続き、この丘陵の東側に断層谷により形成された集落、富田・飯田市上久堅があり、その背後に伊那山脈の鬼面山・氏乗山・金森山が聳えている。

中尾・天神の微地形をみると、中尾は大原段丘崖下にあり、境ノ沢の小支流の浸蝕によって北を大中尾、南を中尾とに分けられているが同一段丘面にある。今次調査の大中尾地籍は大原段丘崖の崩れの影響を強く受け扇状地形を形成しており、西側の段丘崖中央部に谷頭浸蝕が進み僅かな抉りこみをもっている。北の境ノ沢上流は降雨時以外は沢の水はないが、段丘崖中腹には常時絶えることのない涌水があり、かつては畑にきた人たちの水呑場になっていた。

図1 中尾・天神遺跡、小林神社前遺跡位置図及び

周辺主要遺跡分布図 (1:30,000)

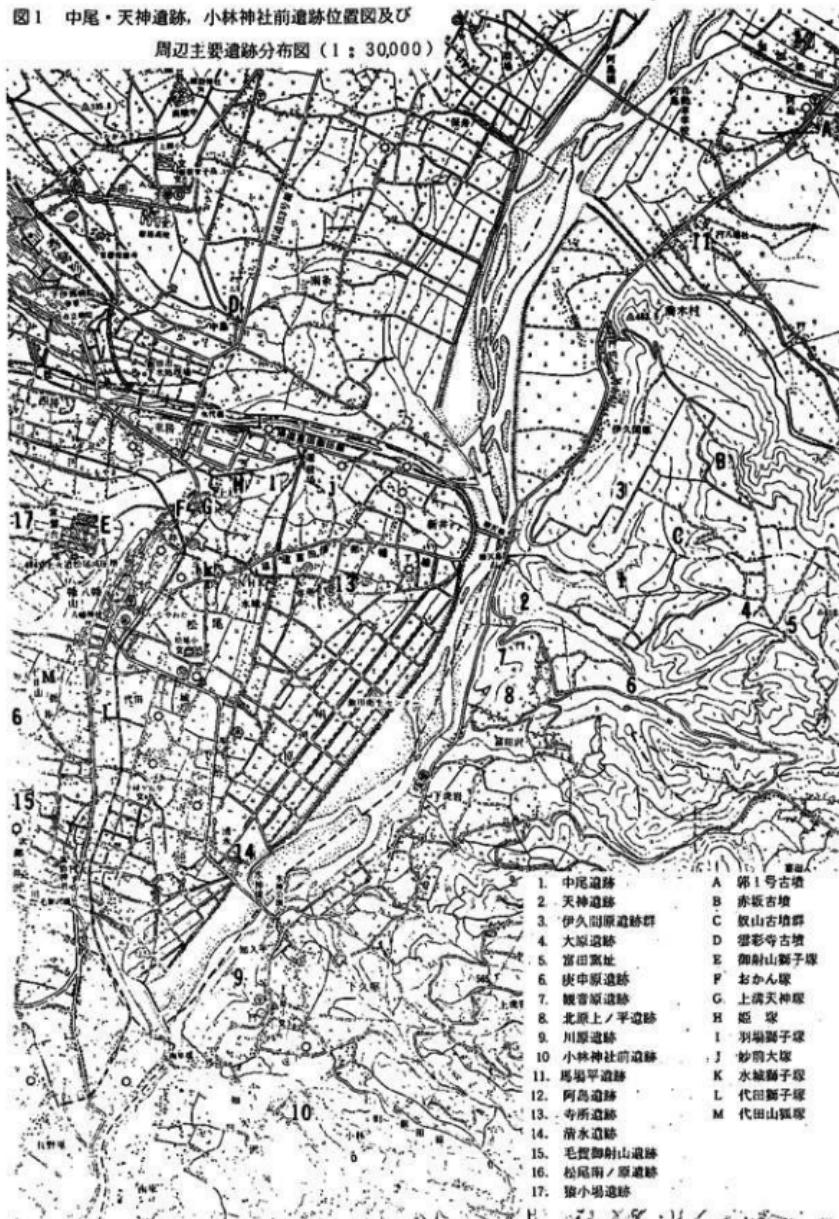




図2 中尾・天神遺跡地形詳図 (1 : 10,000)
(ワク内調査区域)

天神は平坦であるが中尾段丘崖下に近い東側がやや低くなり、ここより北西に向って段丘崖に抉りこむ境ノ沢の支流による小さな崖端浸蝕がある。中尾・天神とも黒土層(耕土)は浅く、15cm~30cmでローム層となっている。

2 歴史的環境

大中尾・中尾では縄文時代中期上器・打石斧・石鎌等が採集されているが中尾地籍は乳牛の団地が早くより開け、遺跡の大半は破壊されていた。天神では縄文晩期の条痕文土器片、弥生時代の磨石鎌等が表採され注目されていた遺跡である。

周辺の遺跡をみると中尾の北にある伊久間原遺跡は縄文早期から前・中・後晩期、弥生時代中・後期、古墳時代前・後期から平安期に至る確認された住居址382を数える大遺跡である。東の上位段丘面にある大原遺跡は昭和53年度調査で縄文早期とみる住居址1、中期中葉末の住居址8、集石場2等が発掘され、有古ポイントの出土をみていている。またこの台地の南東端の机山山麓には江戸時代後半の富田窯址があり、その発掘調査も行われている。大原段丘面の北西端部には、牧山古墳群があり、現在1号・2号・3号・4号墳が現存しているが1号墳を除き周囲は畑によって削りとられている。大中尾より、境ノ沢を越えた道のすぐ東側に赤坂古墳がリング畠の中に墳丘を残している。

中尾・天神の南にある庚申原では今迄遺物の発見がなかったが、今次、中尾・天神と平行して行われた桑園開拓造成事業中に、未調査であった段丘東端部に縄文中期勝坂式土器片が10数点発見されたことは遺跡の立地をみると上位で注目されることであった。その一段下位段丘面の鏡音原は中世陶器片の散布がみられ、北原台地の先端部にある北原上の平遺跡では石皿・人形打石斧のデボ状出土をみており、またここにはハチマツ古墳があったが消滅している。

中尾・天神遺跡周辺の主要遺跡は多く、特に同位段丘面の北に続いて下伊那地方屈指の遺跡が並び、天竜川を隔てた対岸の沖積段丘面には弥生中期・後期、古墳時代前・後期、平安時代から中世への主要遺跡がならび、現在調査中の恒川遺跡群は官衙・寺院址ともみられる重要な遺跡である。また古墳は飯田・下伊那地方で最も密度の高い地帯として知られている。(図1参照)

II 発掘調査経過

昭和54年度県営烟管小浜地区大原・北原工区計画は中尾・天神地区の農道開設・桑園の抜根・1部圃場の整備がなされることになり、これに先立ち中尾・天神遺跡の発掘調査が長野県南信土地改良事務所の委託により飯田市教育委員会が受託して行われたのが今次の調査であり、小林神社前遺跡の烟灌水工事に伴う立合調査も行うことになった。

昭和54年11月1日中尾・天神の分布調査を行い、調査区域を決定した。大中尾ではピット調査により遺構の存在が3か所に認められ、黒曜石片の散布をみた台地北西端部5,000m²を重点区とした。中尾では、かつて遺物の散布をみた地点は乳牛団地となっており、他の地域でも遺物の散布はみられず、台地の北西端部の一箇所低い地点に打石斧1を採集したのみで、工事中バトロールすることとした。

天神では台地端のピット調査によりサヌカイト片が採集され、この地帯3,000m²を調査の重点地区とした。

発掘調査は11月8日から12月18日まで大中尾、12月19日より昭和55年1月31日まで延60日にわたって行われた。なお小林神社前遺跡の烟灌水工事に伴う立合調査は前記調査期間中とその後も工事の進捗に応じて行ってきた。立合調査は幅30cm、深さ70cmの溝の調査であり、配管埋戻前に工事請負業者の連絡に応じて調査したものである。

発掘調査日誌

月 日	天 候	日 緯			誌
54年 11・8	晴	中尾			
		器材運搬、テント張り、グリッド設定、調査にかかる。			
9	“	グリッド調査、1号住居址検出 — 炉址発見により。溝1検出			
10	雨	作業不能			
11	晴	日曜休み			
12	“	2号住居址検出、調査	調査、掘上げ	調査	
13	晴・小雨	調査	写真		部分的調査に終える。
14	晴・寒い	掘上げ測量	測量	3号住居址検出調査	測量
15	晴	桑株の整理作業		調査、断面図をとる。	
16	“	4号住居址検出、調査		調査、掘上げ	
17	くもり・晴	調査、プラン検出、断面図をとる。	写真、測量		溝2検出
18	雨	日曜休み			
19	晴・寒い	掘上げ、測量	北西端部グリッド調査、遺構なし	グリッド西へ延長	

月 日	天 気	日	誌
11・20	晴	写真	溝3・4検出、調査
21	くもり・小雨	5号住居址検出するがプラン不明確	6号住居址検出、プラン不明確
22	" "	プラン検出、掘上げ	耕作による荒れ、黒曜石片多い
23 24 25	雨 くもり・晴 小雨	休 み	
26	くもり・晴	グリッド調査 7号住居址検出、炉址のみ	土坑1号検出、完掘。調査、石器4件出土 調査
27	晴・くもり	調査	土坑2・3号検出調査 調査 溝5・6検出
28	くもり・ 時々 雨	8号住居址検出 調査 周辺の排土作業	掘上げ 掘上げる 溝は開墾時の区画とわかる。 上部の礫まで
29	前夜より 大雨・ くもり	全面水びたし となる。	排土作業 5住・6住測量
30	晴	7号・8号住居址炉址を 中心に拡張調査	土坑4号検出、掘上げ。 土坑1・2・3・4号測量
12・1	くもり・寒い	調査	西端部にグリッド設定 土坑5号検出 土2・3号下部調査、測量
2	晴	日曜休み	
3	晴・朝凍る	7住・8住掘上げ測量、7住の下層に焼土帯検出調査。	土坑5号測量
4	くもり	焼土帯調査 東側へグリッド設定、土坑6・7号検出。	排土作業
5	くもり時々雨	焼土帯1号とし調査、掘上げ測量。 9号・10号住居址検出、調査	
6	朝雨・晴	10号住居址完掘、写真 焼土帯II検出調査。 土坑6・7号掘上げ、写真	
7	晴	9号住居址完掘 9号10号住居址、焼土帯II、土坑6・7・8号測量	掘上げ 土坑8号検出、掘上げ
8	"	石塚南側調査 11号住居址検出 大半は石塚にかかる。 ブルトーラーにより排土作業(1時間)	
9	"	日曜休み	
10	晴・風寒い	12号・13号・14号住居址検出調査	ブルトーラー排土作業(2時間)
11	晴	掘上げ 14号と一つになり消える	14号住居址掘上げ グリッド設定調査
12	"	(。小林神社前配管調査)	
13	晴・朝凍る	13号・15号住居址検出、調査	
14	" "	調査掘上げ	石塚北にトレントン1~4を設定調査
15	晴・くもり 寒い	写真	16号住居址検出、土器I括出土をみる(炉址より)

月 日	天 候	日 誌
12・16	晴	日曜休み
17	"	完掘。耕作により壁は削りとられる。 11号住居址調査 ・12号・13号・14号・15号・16号住居址測量
18	"	遺構分布測量 土坑9号検出完掘測量 完掘測量 大中尾地区完了、テント撤収、天神ヘテント張り
19	晴・くもり	天 神 グリッド設定 調査 住居址とみる落ちこみを検出
20	朝雨・晴	煙境の溝となる。
21	くもり	桑畠一帯は天地替しのため荒れ、遺構は破壊されている。西側に移り調査 1号・2号住居址検出。— 鋼文中期土器片、石器多し
22	朝雨・晴	調査プラン検出、2住石鍤5こかたまて出土。土坑1・2号検出掘上げ
23	くもり・雨	日曜休み
24	朝雨と雪、晴	1住・2住掘上げ、測量。 グリッド西に延し調査
25	くもり・小雨	写真 3号・4号住居址検出。全面排土作業
26	晴	5号住居址検出調査。プラン検出、掘上げ測量。 土坑3・4号検出、掘上げ、測量
27	くもり時々雨	完掘、測量 — 遺物極少。 6号住居址検出調査 南西側全面排土作業
28	晴	調査掘上げ測量 土坑5・6・7号検出、掘上げ測量 54年作業を終りとする
29	"	図の整理のため、再確認をする
12月29日より 55年1月7日まで		年末・年始休み
55年 1・8	晴・ 寒さ厳しい	7号住居址検出、調査 南東側の畑にグリッド設定調査、遺構なし
9	晴・くもり	掘上げ、写真、測量 上段面中尾地区にトレンチ1.2.3を設定調査。 西端部へ拡張調査 遺構なし
10	雪	作業不能
11	晴	8号・9号住居址検出、盛土排除作業。 中尾地区的工事中のバトロール 追構・遺物なし
12	晴・朝凍る	調査掘上げ、写真、測量 遺構分布測量 "
13 17	雪	作業不能
18	晴	(小林神社前調査)
19	"	器材、テント撤収し、中尾、天神の現場調査を終わる。

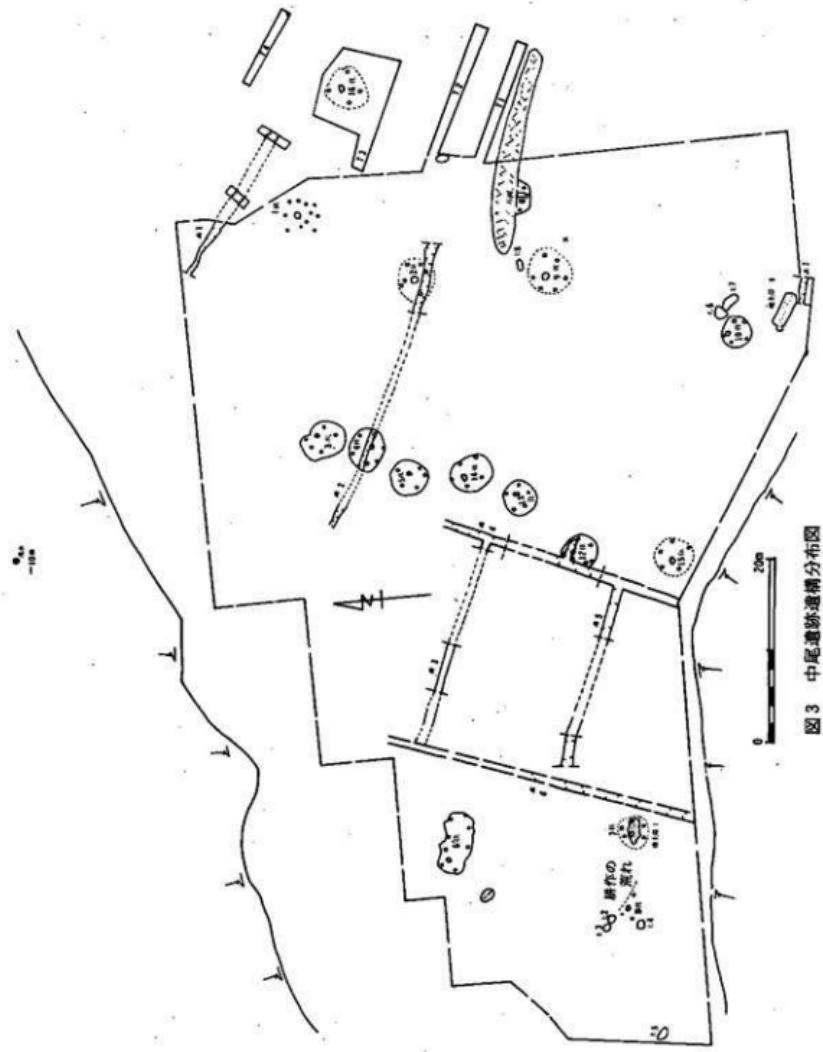


图 3 中尾遺跡遺物分布圖

III 調査結果

(I) 中尾遺跡

中尾遺跡は細分すれば大中尾・中尾とに分れるが、同一段丘面にあり、小さな崖端浸蝕の中央部に入りこんでいるため大中尾・中尾と細分されているが、一般的に中尾と呼ばれており、同一面の遺跡としてとらえ中尾遺跡と総称することとした。調査は大中尾地域を中心として行ったものである。中尾地域はすでに乳牛団地、養豚団地化され造構所在地の中心部は破壊されており、桑株抜根時に全面のパトロールを実施したが造構・遺物は発見されなかった。

発掘調査した造構は次のようにある。(図3)

住居址 16 繩文早期4、繩文晩期12

焼土帯 2

土坑 9

溝 7 —— 開墾時の畠の境界

1 住居址

(1) 繩文早期末

中尾1号住居址(図4)

調査区域の北東にあって、グリッド調査時炉址の発見によって住居址の存在を確認したものである。表土下15~20cmがあり、壁は削りとられたか、または無かったものとのみられる。径2.8mの円形に8つの柱穴がめぐり、さらに北から東にかけてその外周に4つの柱穴がみられる。床面は極めて堅く、炉址はほぼ中央部に浅い掘込みの楕円形の地床炉で焼土は著しい。遺物は黒曜石の小破片が数点のみで時期は決めがたいが住居址の状態から早期末と考えたい。

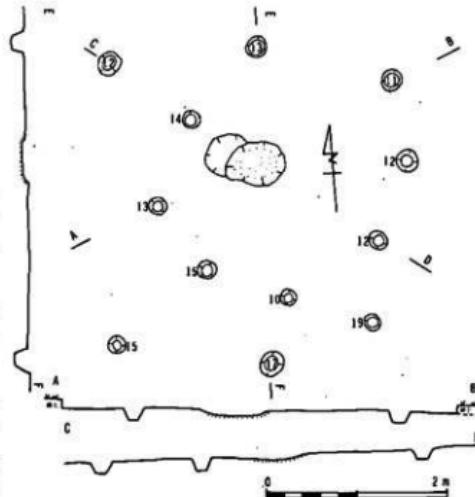


図4 中尾遺跡1号住居址

中尾3号住居址(図5)

調査区域の最も北に発見された住

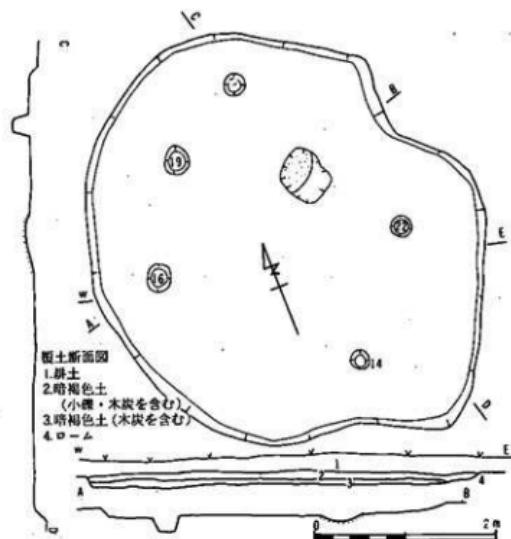


図5 中尾遺跡3号住居址

同類の出土をみており、早期末に位置づくものとみる。この他薄手の無文小片と黒曜石小片数点がある。

中尾4号住居址(図6)

3号住居址の南0.6mにあり、南北3.9m×東西4.75mの変形円をなし、ローム層に深さ15cm前後掘りこむ竪穴住居址であり、中央部を東西方向に開窓時の境界溝2が壁を切っている。覆土断面図にみると表土8cmの浅い耕土下のローム層に掘りこみ、覆土は木炭を多く含む暗褐色土である。床面土は堅く溝による荒れが部分的にみられた。柱穴7つが壁に沿って不規則にめぐらし、炉址は中心より南に片寄ってあり、楕円形の地床炉で内部に2つの礫が置かれている。

遺物(図36の5~11)は少ないが、土器には5のやや厚手の

居址で、同時期の4号住居址の北0.6mにある。南北4m×東西4mの不整形な円形をなし、北壁で8cm、南壁で15cmローム層に掘りこむ竪穴住居址である。覆土は断面図でみると表土は15cm前後で、その下に小礫と木炭を含む暗褐色土が5~10あり、さらに小礫を含まない木炭を多く含む暗褐色土の4~8cmあって床面のローム層となる。床面はあまり堅くなく主柱穴は西側に3つ、東側に2つの5つがあり、炉址は中心より北に片寄ってあり、浅い楕円形の地床炉である。

遺物(図36の12)は僅少で図示するものは1点のみである。口唇部に浅い刻みをもつ無文の土器片で伊久間原22号住居址に、これと

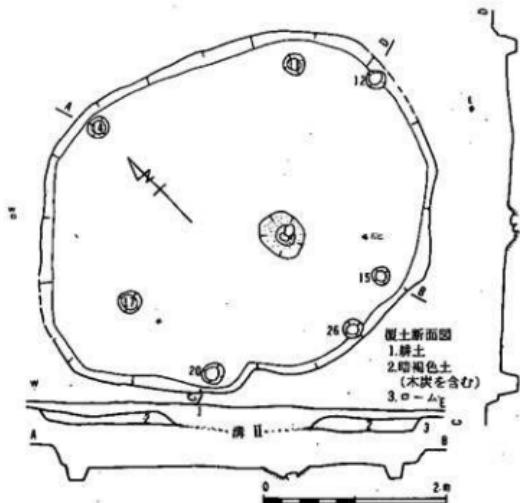


図6 中尾遺跡4号住居址

無文・口唇部に押引をもつもの、6~8の薄手の条線と撚糸文をもつがあり、早期末の伊久間原22号住居址と同系統とみられる。石器9はチャート製の長さ9cm×幅4.5cmの横断面は台形をなす剥片石器である。石匙には10・11があり、10は黒曜石、11はチャート製である。図示外に黒曜石片数点がある。

中尾7号住居址(図7)

調査区域の南端部に発見され、径2.5m前後の範囲に円形にめぐる小柱穴が5こあり、北東側に炉址とも見る焼土の著しい掘りこみがある。しかし中央部を東西方向に焼土帯Iが掘りこまれ、それによって大半は破壊され、また表土は浅く耕作によても崩され十分にその規模を知ることはできなかった。

遺物(図36の20)は僅少で図示したものは20の石匙のみで黒曜石製である。土器片は極薄の小片があり黒曜石片・チャート片10数点がある。住居址の形態と僅かな遺物からみて早期末の住居址とみたい。

(2) 義文晩期

中尾2号住居址(図8)

調査区域の東側にあり、南3分の1は開墾時の境界溝2によって東西方向に浅く切られている。表土下

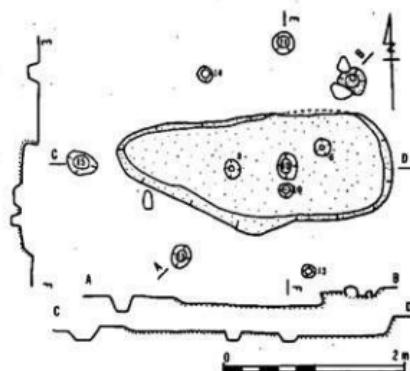


図7 中尾追跡7号住居址焼土帯I

中尾2号住居址(図8)

調査区域の東側にあり、南3分の1は開墾時の境界溝2によって東西方向に浅く切られている。表土下

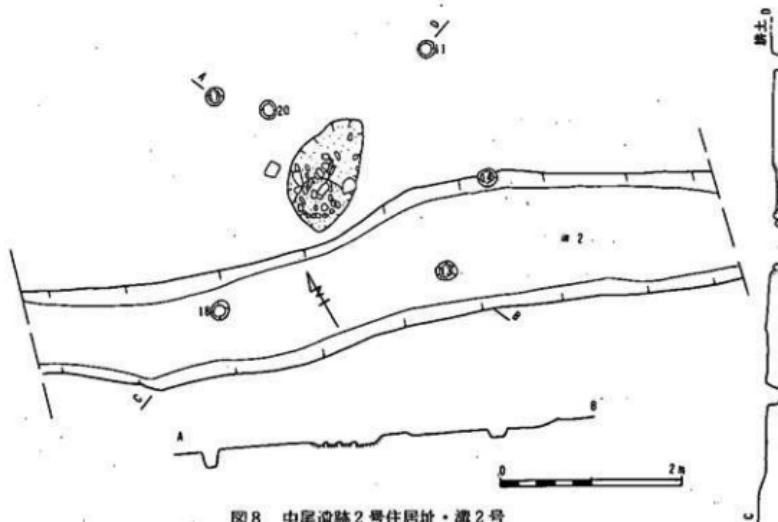


図8 中尾追跡2号住居址・溝2号

10~15cmに床面があり、壁はなく、炉址の発見によって住居址の存在を確認したものである。柱穴を結ぶ対角線上の距離は3.65mと3.15mがあり、楕円形をなす住居址とみられる。床面は堅く、主柱穴は配置からみて5ことみると。炉址はほぼ中央部にあり、東西方向に長軸をもつ楕円形で西側は一段下がり、深さ10cmの掘り込みの地床炉で、内部に小礫が敷かれ、西側掘りこみ部の焼土は著しい。

遺物（図37・図36の1~4）土器は小片のみで図示したものに図37の1~3があり。1は無文とみられ、2・3は条痕文土器であり、これらの他無文の小片が数点ある。石器には図37の4~9の打石斧と図36の1~3の石鎌と4の石錐がある。打石斧の大部分は折れしており、また大半が大形である。石鎌は1・2は黒曜石、3はチャート製であり、4の石錐はチャート製であり、古い時期のものとみられ、本址については開墾時の投げこみの遺物も多いとみられ、住居址の形態からみて早期とも思われるが、はっきりいえない。

中尾5号住居址（図9）

南北2.3mに同時期の14号住居址があり、南北4.1m×東西3.6mの楕円形をなし、ローム層に約10cm掘りこむ堅穴住居址であるが、西側2分の1以上はあまり堅くなく、主柱穴は5ヶ所。炉址は中央部よりやや東に片寄っており、深さ10cm前後の掘りこみの地床炉であり、灰と焼土を僅かにもつものである。

遺物（図38の1~4）は少なく図示したのは石器のみで、打石斧・小形敲打器、磨石があり、土器は無文の小片があるので時期をはっきり決めがたいが、他の住居址との関連からみて縄文晩期と考えたい。

中尾6号住居址（図10）

調査区域の西端部にあり、南北3.1m×東西7.1mの不整形な長楕円形をなす堅穴住居址である。中央部は溝によって、西側は耕作によって荒され、正確に把握できなかったが、形態からみて2住居址ともみられる。東側では10~15cmの壁高をもつが西にいくに従い耕作によって壁は削られて浅くなり、消えてしまっている。床面は東側2分の1の中央部は溝のため削られて不明であるが、残る面は堅く、柱穴は壁に沿って8ヶ所が配置されている。炉址

は西に片寄ってあり浅い掘り込みの地床
炉である。

遺物（図36の13~19）土器は図示しないが、小片のみで条痕文と無文がある。13の小形打石斧、14の横刃形石器は凝灰岩製。15は石匙の基部を欠くものとみられ、16~19の石鎌は16・17が有舌、17がチャート製の他は黒曜石である。黒曜石片チャート片の出土は多い。

中尾8号住居址（図11）

調査区の南西端部に炉址の発見によって住居址の存在を確かめたものである。南側に僅かに壁を残すが、耕作によって大半は削りとられたものとみる。

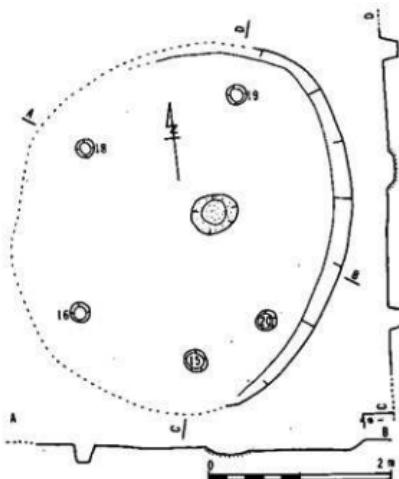


図9 中尾遺跡5号住居址

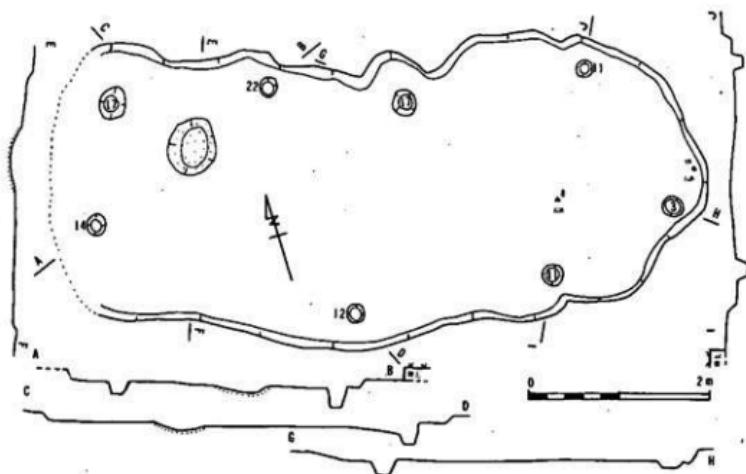


図10 中尾遺跡 6号住居址

また北側は耕作によって崩されている。床面は堅く、柱穴は4こ検出されているが、その配置からみて主柱穴は5ことみられ、柱穴を結ぶ対角線上の距離は2.6mからみると径約3.5m前後の円形をなす柱穴住居址であったと思われる。炉址は中央より西に片寄ってあり、2この掘り凹みをもち、焼土は著しい。

遺物は図示するものではなく、土器は無文の小片が数点あり、黒曜石片20數点とチャート片数点がある。住居址の形態、土器片からみて縄文晩期のものと考えたい。

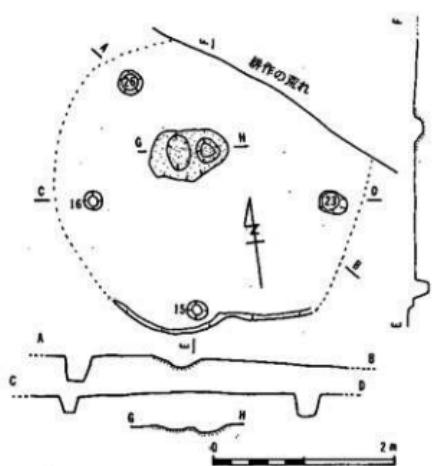


図11 中尾遺跡 8号住居址

中尾9号住居址（図12）

調査区東側の中央部にあり、炉址の発見によりその存在を確かめたものである。地表下15cm前後ローム層に床面があり、このため壁が削り採れたものか、窓穴住居であったかは不明である。柱穴の配置からみて径4m～4.5mの横円形をなす住居址とみられる。床面は堅く、主柱穴は6こ、炉址は中央部より北西に片寄ってあり、横円形に15～20cm掘りこむ地床炉で、焼土は著しい。

遺物（図38の5～11）は少なく、土器は5～8にみる条痕文土器片が10數点あり、炉址内の出土で同一個体とみるものである。石器には9の刃部を欠くが大形の打石斧、10・11の大形の横刃形石器があり、黒曜石片10点の出土をみている。

中尾10号住居址（図13）

調査区の南東端部に発見され、土坑6・7号が東に隣接し、南北2.5mに焼土帯II号がある。南北3.55m×東西3.4mの円形をなし、北壁で5cm、南壁で15cmローム層に掘りこむ窓穴住居址である。床面は堅く主柱穴5ヶ所が壁に沿って配置されており、炉址は中心より北に片寄っており、梢円形の地床炉である。

遺物（図38の12・13）は僅少で図示したのは条痕文をもつ12・13の晩期土器片で、その他無文土器片数点がありいずれも炉址内出土である。他に黒曜石片数点がある。

中尾11号住居址（図14）

調査区東端中央部にある石塚に接して発見され、3分の2以上は石塚のために破壊されている。東西3.5mの隅丸方形となるローム層に掘りこむ窓穴住居址で、表土下10~15cmでローム層となるため壁は削りとられたとみられ、西壁で3cm、東と南壁で8cmの壁高を残している。床面は堅く、柱穴は2ヶ所発見されているが、その配置からみて4~5ヶ所とみられる。炉址は僅かに掘りこむ地床炉で焼土は

著しく底部に地山のものとみる跡がはいっている。

遺物は図示するものはないが、無文土器の小片数点がみられ、他の住居址出土土器よりみて縄文晩期とみたものである。

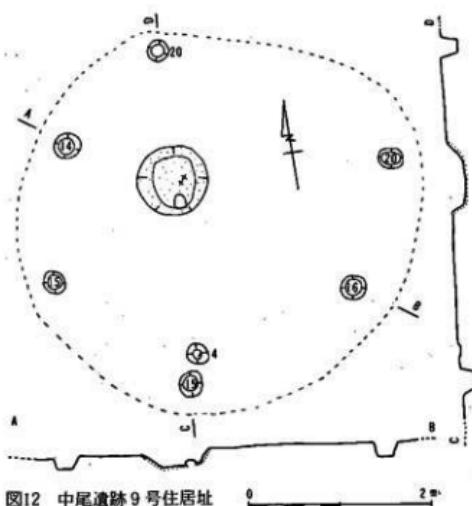


図12 中尾遺跡9号住居址

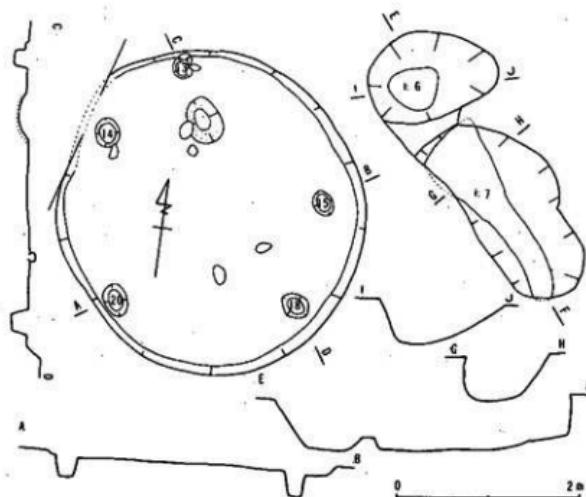


図13 中尾遺跡10号住居址・土坑6号・7号

中尾12号住居址（図15）

調査区中央部の南側、13号住居址の南5mにあり、開墾時の溝によって西側の1部は切られ、さらに北側に耕作時の小溝に僅かに削られている。南北・東西径3.95mの円形をなし、耕作によって壁の大半は削られたとみられる。5cm前後の壁高を残すのみであるが、堅穴住居址であったともみられる。柱穴は6こ発見されているが、それらの配置からみて主柱穴は4ことみられる。床面はやや堅く、炉址は東西方向の耕作溝に北側に削られているが、13cmの深さに掘りこむ円形の地床炉であるが、焼土は少なく、内部の炭・灰は多くみられる。

遺物（図38の14～19・図36の21）は少なく、土器は14～16の条痕文土器片と17・18の立上りをもつて胴部へと開く底部片があり、図示外に条痕文・無文の小片10数点がある。石器には19の敲打器があり、図36の21の石鎌があるが覆土出土である。

中尾13号住居址（図16）

調査区のはば中央部に発見され、14号住居址の南2mにある。南北3.75m×東西3.55mの梢円形をなし、東と南で壁高7cm前後をもつが西側には壁はみられない。浅い堅穴住居址であったが開墾のさい壁の大半が削りとられたものとみられる。主柱穴は5こ整った配置にあり、床面は堅く、炉址は中心より北東に片寄ってあり、梢円形の深さ20cm掘りこむ地床炉で、焼土は少なく、内部に灰・炭が充満していた。

遺物（図38の20）は僅少で図示したものは条痕文土器片の1点のみで、他に無文の小片が数点ある。

中尾14号住居址（図17）

調査区のはば中央部にあり、13号住居址の北2mにある。南北4.6m×東西4mの梢円形をなし、ローム層に約10cmと浅く掘りこむ堅穴住居址である。床面は堅く、主柱穴は5こ、柱穴は小型で浅い掘りこみである。炉址は中央より北に片寄ってあり、梢円形の深さ15cm掘りこむ地床炉であり、焼土は少ない。

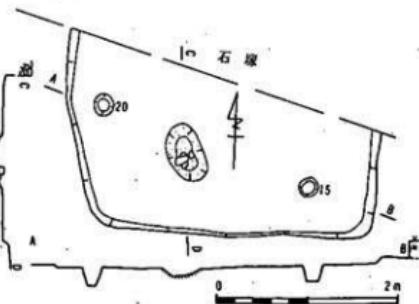


図14 中尾遺跡11号住居址

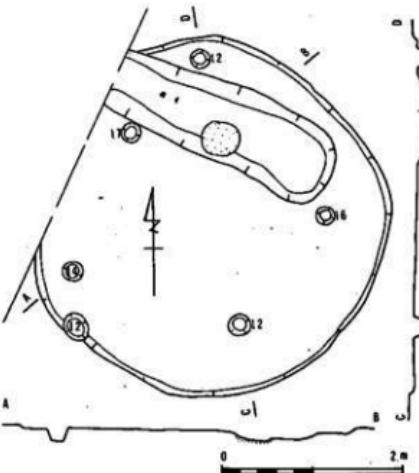


図15 中尾遺跡12号住居址

遺物（図39の1～10、図36の22）には土器では3～5の条痕文土器を主体とするものがあり、図示外にも小片は多い。石器には6・9の打石斧と7・8の横刃形石器と10の敲打器があり、図36の22は有舌の石鎌である。6は側部、9は基部を欠き、石鎌（22）は舌部を欠いている。

中尾15号住居址（図18）

調査区中央部遺構列の南端に発見され、その南は台地中央部を抉る崖端侵食部に接している。炉址の検出によって住居址の存在を確かめたもので、壁ではなく、開墾時に削りとられたか、堅穴住居址でなかったかは不明である。床面は堅く、それによってプランを知ったもので、南北3.5×東西3.7mの円形をなすものとみられる。主柱穴は5ヶ、いずれも小形の掘込みの浅いものである。炉址は中心より西に片寄っており、円形の地床炉で、焼土は著しい。

遺物（図38の21～23）は少なく、土器で図示したのは21・22で、21は凸帯をめぐらすものであり、22は条痕文がみられ、図示外に無文土器片数点がある。23の打石斧は硬砂岩製である。これらの他に黒曜石片数点がある。

中尾16号住居址（図19）

調査区の東端にあり、炉址の発見により、住居址の存在を確かめたものである。床面は極めて堅いが部分的に耕作によって荒らされ、4つの柱穴の配置からみて楕円形をなす住居址とみられるが、堅穴住居址であったかは不明である。柱穴は4ヶ発見されているが、耕作のため北東側は不明であり、主柱穴は配置からして5つとも思われる。炉址は中心より北に片寄っており、楕円形の地床炉で中に条痕文土器2個体が入っていたが、大半は失なわれていた。

遺物（図39の11・12）は炉址内の土器のみで11の深鉢の頸部は僅かにくびれ口

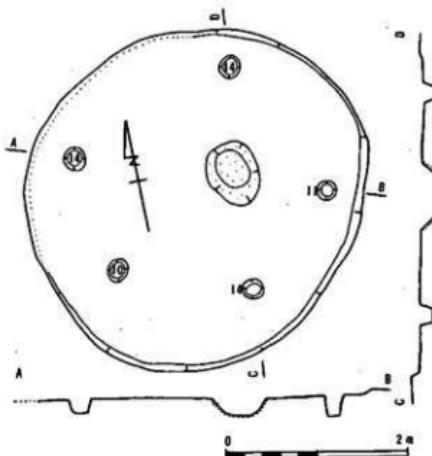


図16 中尾遺跡13号住居址

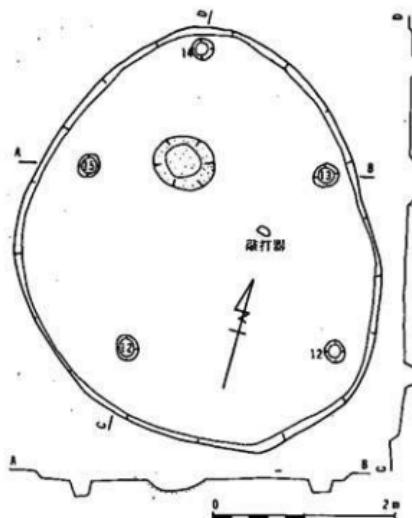


図17 中尾遺跡14号住居址

縁部は斜に直行して開き無文・底部は立上がりで僅かに開き、張りの小さな洞部となり、單方向条痕文が施されているが、炉址内の二次的な焼けで器肌ははがれ、僅かに条痕文を残すものである。12の深鉢も器肌は荒ており、單斜線の条痕が施されるもので、いずれも縄文晚期後半のものである。

2. 焼土帯

焼土帯 I (図7)

7号住居址を切って掘りこむ南北1.2m×東西3mの不整長楕円形をなし、東側で20cm西側で5cmのローム層に掘りこみ、内部は灰と木炭を多量に含む黒漆な覆土でおおわれ、底部の焼土は顕著なものである。遺物はなくその時期は決しがたいが、覆土・その形態からみて開創時の炭焼きのものでないことは確かである。主軸方向N 86°Wを測る。

焼土帯 II (図20)

調査区の南東端部にあり、開創時の溝7号がすぐ南に接している。南北1.4m×東西3.6mの隅丸長方形をなし、さらに西側に亀頭状の突起部が付く。ローム層に20cm前後の深さに掘りこみ、東西方向に中央部に幅20cm前後、深さ5cm前後の溝状の掘りこみがあり底部全面の焼土は顕著であり、覆土は断面図にみるように上部は木炭・灰を多く含む暗褐色土、その下部は漆黒の木炭・灰の層となっている。主軸方向はN 60°Wを測る。出土遺物はなく、その時期、性格は把握できなかったが焼土帯I号と同じ性格のものとみられ、その整った形態と中央部の溝状の掘りこみ、亀頭状の突出部等は祭祀的な意味をもつものとも思われ、周辺の縄文晚期の遺構群と関連するものとも考えられないだろうか。

3. 土坑

土坑9が調査され、2号～4号は調査区の南西端部にまとまり、その西に5号があり、いずれも小砾を詰める浅い掘りこみの土坑である。6号・7号は10号住居址に隣接し、2土坑は接しあう深い掘りこみのものである。これ等以外は集落の外周に散在して発見されている。以上を次の一覧表にまとめた。

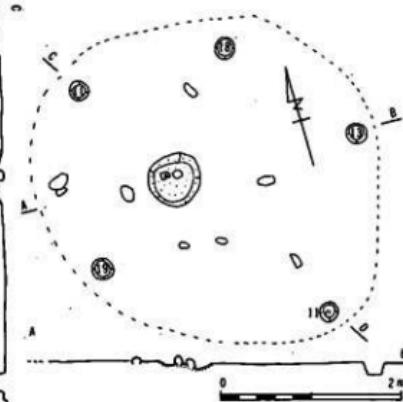


図18 中尾遺跡15号住居址

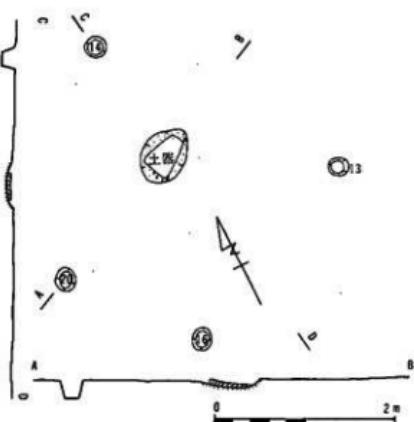


図19 中尾遺跡16号住居址

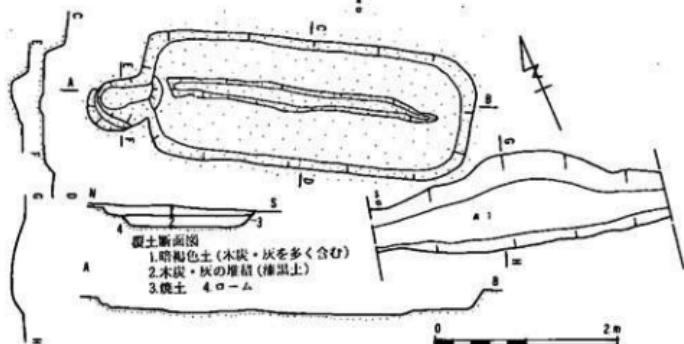


図20 中尾遺跡焼土帯Ⅱ・溝7号

中尾遺跡土坑一覧表（表1）

土坑 No.	図 No.	大きさ(cm) 南北・東西	深さ (cm)	形 状	主軸方向	遺 物	備 考	時 期	遺物図 No.
1	22	110 × 172	20	不整形橢円	N 84°W			不 明	
2	21	64 × 94	20	隅丸方形	N 60°W		小礫が詰まる	"	
3	"	65 × 99	18	楕円形	N 60°W	打石斧1 横刃形石器2	"	縄文 晩期? 1~3	
4	"	73 × 95	7	"	N 78°W		"	不 明	
5	22	152 × 75	6	長橢円形	N 35°W		"	不 明	
6	13	96 × 92	55	楕円形	N 63°E	横刃形石器1	土坑7号に接す	縄文 晩期? 4	
7	13	220 × 105	50	不整形長橢円	N 38°W	条痕文土器片 1	土坑6号に接す	"	40の 5
8	22	63 × 127	12	長橢円形	N 88°W	打石斧1		"	40の6
9	"	130 × 100	40 18	楕円形	N 22°E	縄文晩期土器 片	2段になって、 北が深くなる	縄文 晩期 7・8	

4. 溝 (図3・20・23)

溝7を調査したが、幅1m前後、深さローム層に10~30cm掘りこむものである。最初の調査時点では土器片・黒曜片等が発見され、古い時期のものとみられたが、調査が進むにつれ、煙の境界に沿うものが大半を占め、方形につながるものとなってきた。開墾時の煙の境界溝となることが判明された。溝3より図36の23の有舌チャート製の石器の出土をみている。

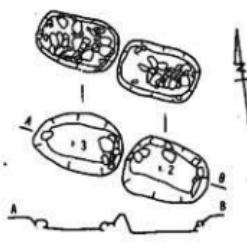


図21 中尾遺跡土坑2号・3号・4号

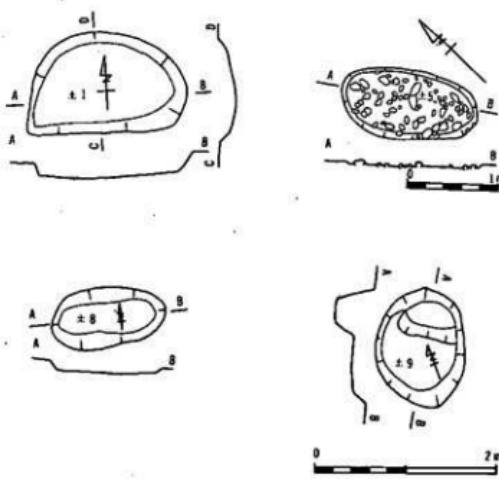


図22 中尾遺跡・土坑1号・5号・8号・9号

5. 遺構外の遺物

開墾時の境溝より多くの黒曜石片の出土をみ、特に溝3より前述の図36の23のチャート製の有舌石鏃があり、開墾時に遺構を崩した際の混入の遺物とみるものである。

開墾時より農作時に至る畑の石の捨場となった石塚と呼んでいる小疊積みより図41の石器が上部より採集されている。石塚は調査区の東端中央部に東西方向に約幅2~3m、長さ20m余にわたってあり、西側

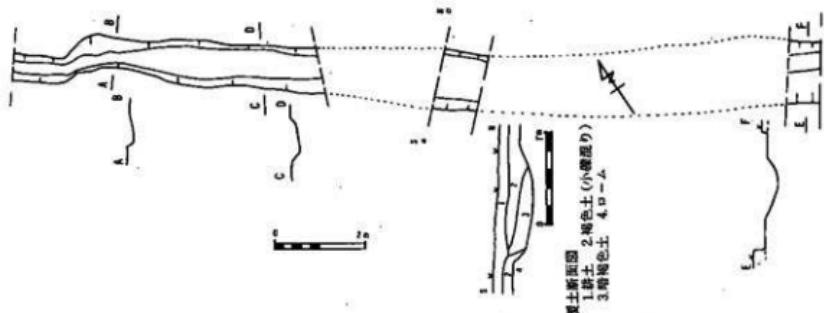


図23 中尾遺跡・溝1号

では高さ50cm、東にいくに従い低く乱雑に投げこまれている小礫の堆積である。

採集された打石斧の大半は大型化されており、縄文後、晩期から弥生時代にみるものであるが、自然面をもたぬ点からみて縄文晩期の石器とみたい。小礫と共にここに捨てられた石器は多量のものと思われ。また調査区南の崖頭浸蝕の谷に投げこまれた量も多いものとみられ、開墾時、耕作によって遺構は破壊され、遺物の大半は投げ捨てられたものと推測される。

中尾遺跡石塚採集石器一覧表（表2）

No.	器種	材質	長さ(cm)	幅(cm)	重量(g)	備考
1	打石斧	硬砂岩	16.0	7.0	715	
2	"	"	16.5	7.8	500	
3	"	"	13.8	6.6	390	
4	"	"	13.6	7.2	300	
5	"	"	11.8	5.8	215	
6	"	"	14.5	6.4	395	
7	"	"	11.7	4.8	150	折、刃部を欠く
8	"	"	7.7	4.0	68	
9	"	"	9.2	6.0	202	折、刃部を欠く
10	"	"	10.9	6.1	230	折、刃部を欠く 側面打痕 両面を磨く
11	敲打器？	凝灰岩	18.0	5.9	645	
12	打石斧	"	14.0	4.0	205	
13	"	"	12.0	4.7	120	
14	"	"	8.8	3.8	40	
15	"	"	8.5	4.5	100	折、基部を欠く 側面打痕
16	"	"	12.5	3.5	200	刃部に土ずれ
17	石錘	"	8.0	6.2	72	
18	凹石	花崗岩	9.4	11.5	815	

(II) 天神遺跡

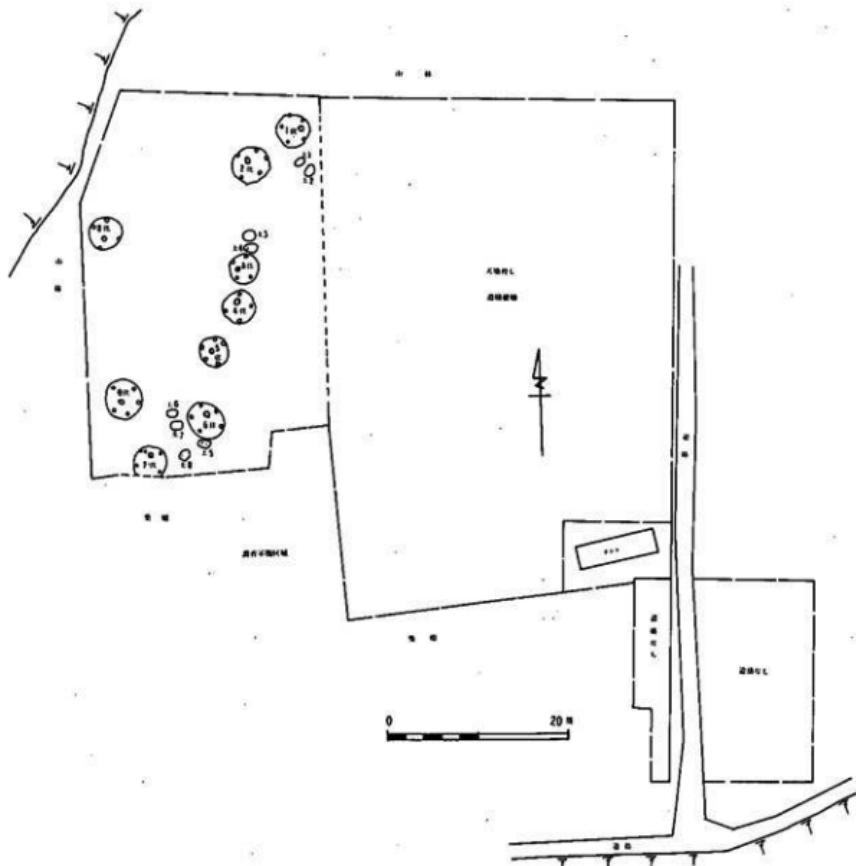


図24 天神遺跡遺構分布図

(II) 天神遺跡

天神遺跡での調査予定面積約3,000m²のうちかつて遺物の散布をみた東側の3分の2以上はグリッド調査の結果天地替しの行なわれたことが判明し、このため台地西先端部の荒し畑1,000m²について調査し、遺構を検出したが表土から12~20cmでローム層となり、耕作によって住居址の壁は削られ、遺物の大半は散逸したものとみられる。

発掘調査した遺構は次のようにある。(図24)

住居址 9 , 繩文中期中葉 7 , 繩文後期? 2 , 土塙 8

1. 住居址

(1) 繩文中期中葉

天神1号住居址(図25)

天神遺跡群の北端に発見され、北西2mに2号住居址があり、南1.35mに土坑1号がある。南北3.5m×東西3.7mの円形をなし、ローム層に5~10cmと浅い掘りこみをもつ堅穴住居址であるが、おそらく表土下10~20cmでローム層となっており、開窓時に壁の大半は削りとられたものとみられる。床面は堅く、主柱穴5ヶ所、北から東は壁に付いており、炉址は中心より東に片寄ってあり、55cm×45cmの梢円形の

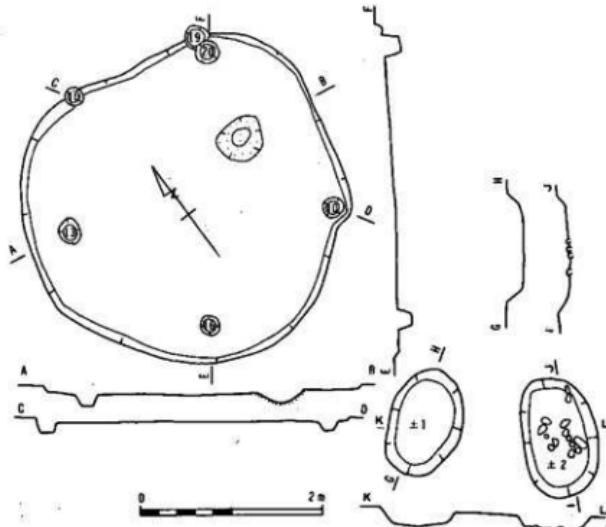
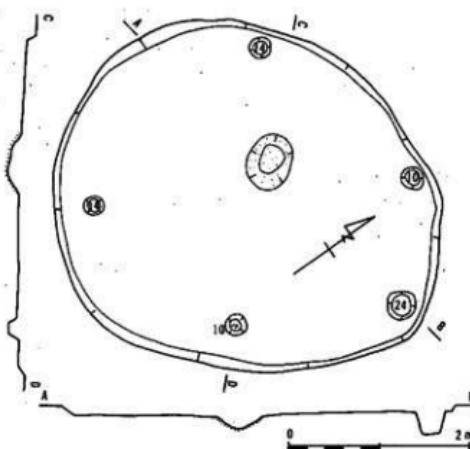


図25 天神遺跡1号住居址・土坑1号・2号

地床炉で焼土は少なく、内部は灰が堆積していた。

遺物(図42)は少なく、土器で図示したのは1~4のみで、その他小片が多く、いずれももろく、文様を知ることができない。1・2の文様は不明。3に爪形文、5は荒い繩文、4は彫り深い沈線と縦帶による区画文をもつとるもので中期中葉の土器とみる。石器には6~9の打石斧があるが完形ではなく、硬砂岩製であり、10の石鍬、11は小形打石斧とみるもの。12の横刃形石器があり、10は硬砂岩、11・12は凝灰岩製である。



天神2号住居址(図26)

1号住居址の南西2mにあり、南北3.8m×東西4.45mの楕円形をなし、ローム層に10cm弱の浅い掘りこみをなす堅穴住居址である。表土下15~20cmでローム層となり、開墾・耕作時に壁の大半は削りとられたとみられる。床面は堅くなく、主柱穴5が壁に沿って配置されている。炉址は中心よりやや西に片寄っており、50cm×45cmの楕円形の地床炉で15cm床面より掘りこみ、焼土は少なく、内部は灰の堆積である。

遺物(図43・36の24) 土器小片のみで図示できるものはないが、勝坂式の土器である。石器は多く特に石鍬の多いのが注目される。打石斧(1~5)の1~3は硬砂岩、4・5は凝灰岩製で5は基部を6は刃部を欠いている。横刃形石器(6~7)に6・7があり、6は硬砂岩、7は凝灰岩製である。石鍬(18~22)15この出土をみており、表3に測定値を示した。23は花崗閃緑岩製の磨石で重量450gを測る。また図36の24の石鍬の出土をみている。

天神3号住居址(図27)

2号住居址の南7.5m、南0.5mに4号住居址がある。南北3.9m×東西3.15mの整った円形をなし、東側でローム層に5cm前後、西から南にかけては僅かに壁の痕跡を残す堅穴住居址であり、西側では表土下12cmでローム層となる浅い耕土であって耕作によって壁の大半は削りとられたのみである。床面は堅く、主柱は4で壁に沿って配置され、炉址は中心より西に片寄ってあり、50cm×40cmの楕円形をなし、深さ13cmの浅い掘りこみの地床炉で焼土は少ない。

遺物(図44の2~7) 土器の出土は少なく図

図26 天神遺跡2号住居址

天神2号住居址出土石鍬測定表(表3)

図43 No.	材質	長さ(cm)	幅(cm)	重量	備考
8	凝灰岩	6.0	4.5	75	
9	"	6.7	4.4	56	
10	硬砂岩	5.6	5.3	35	片面欠け
11	"	7.5	5.6	86	
12	"	7.3	5.7	98	
13	"	8.3	6.0	108	
14	"	7.8	4.1	80	
15	"	6.6	4.1	55	
16	"	5.8	5.1	56	
17	"	5.5	4.8	80	
18	"	7.0	5.2	73	
19	"	5.7	4.1	50	
20	"	5.9	5.4	60	
21	"	6.5	4.2	69	
22	"	5.4	4.5	57	

示したものは1・2の2片で勝坂式である。この他小片10数点があるが2の同一個体の無文のみである。石器には3・4の打石斧と5～7の横刃形石器がある。3・5・6が硬砂岩、4・7は凝灰岩製である。

天神4号住居址（図28）

天神遺跡遺構群のほぼ中央部にあり、0.5m北に3号住居址が隣接している。南北3.6m×3.55mの円形をなし、ローム層に5cm前後の深さの浅い堅穴住居址であるが、表土下西側で12cm、東側で19cmでローム層となっており、開墾時に壁は削りとられたものとみる。床面は堅く主柱穴は4ヶが壁に沿って配置され、炉址は中心より北に片寄ってあり、65cm×55cmの楕円形、深さ15cmの掘りこみの地床炉で、焼土は少ない。炉址内部に図44の8の深鉢1個体が入っていた。

遺物（図44の8～10、図36の25）は少なく、土器は8の深鉢が本遺跡唯一の器形を残すものであるが二次的な焼けのため脆い。高さ18.4cm、口径14.2cm、口縁部を2条の彫の深い沈線がめぐり、その下に3条が等間隔となるように細い沈線がつき、それより縦に胴部を4等分する2条の沈線が下がり、その間隙を半截竹管による沈線が杉綾状に、また模位に2条の沈線に向っている。諏訪地方の藤内式に比定されるものである。その他土器の小片数点があり、石器に図44の9・10の打石斧と図36の25の石鎌がある。

天神6号住居址（図29）

調査区域の南側に発見され、土坑5～7号が西側に隣接し、南西4mに7号住居址がある。南北3.6m×東西4.25mの楕円形をなし、開墾時に壁は削られたとみられ、3～7cmと浅くローム層に掘りこみの痕跡を残す堅穴住居址である。床面は堅く、主柱穴は壁に沿って5ヶが配置されている。炉址は北に片寄ってあり、55cm×37cmの楕円形の10cmと浅い掘りこみの地床炉で焼土は少なく、内部は灰・炭が充満していた。

遺物（図44の13）は少なく、図示できない勝坂式の小土器片10数点と図示した13の磨石斧が1点のみである。磨石斧は基部を欠き凝灰岩製のものである。

天神7号住居址（図30）

調査区域の南端部に発見され、南側の1部は用地外にかかって調査不能となった。東西径3.65mの円

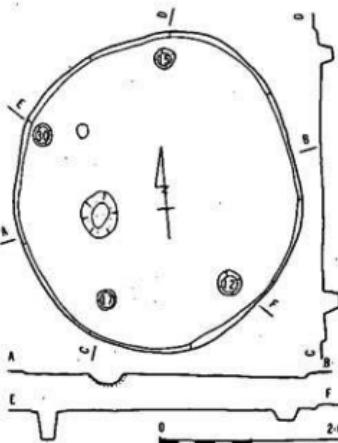


図27 天神遺跡3号住居址

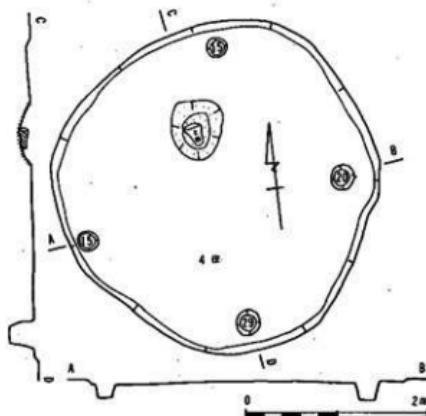


図28 天神遺跡4号住居址

形をなし、ローム層に6~10cm掘りこみの窓穴住居址であるが壁上部は開窓時、または耕作によって削りとられたものとみられる。床面は堅く、主柱穴4ヶが検出されているが、配置からみて5ことと思われる。炉址は北に片寄ってあり、径35cmの円形の深さ12cm掘りこみの地床炉で焼土は少なく、内部には灰が充満している。

遺物(図44の14~19) 土器は僅少で図示したのは14の燃糸文をもつ土器のみで十分に時期を知るには不十分なものであるが、縄文中期中葉に位置づくものとみた。石器は打石斧に15~18があり、15は凝灰岩、16~18は硬砂岩製である。19の磨石斧は輝緑岩製で刃部を欠く。

天神8号住居址(図31)

調査区の最西端部に他遺構と離れて発見され、3号住居址の西12mにある。南北3.6m×東西3.8mの円形をなし、ローム層に僅かに掘りこみの痕跡を残す窓穴住居址である。表土下10cm前後でローム層となり、開窓時、耕作等によって壁の大半は削りとられたとみられる。部分的に残る床面は堅く、主柱穴は4ヶが壁に沿って配置され、炉址は南西に片寄ってあり、50cm×42cmの梢円形、深さ12cmの掘りこみの地床炉で焼土は著しい。

遺物(図44の20~22)は少なく、土器は図示しないが勝板式の小片10数点があり、石器に凝灰岩製の打石斧(20)と21・22の硬砂岩製の横刃形石器があるのみである。

(2) 縄文後期

天神5号住居址(図32)

同時期の9号住居址の北東7.5mにあり、径3.25mの円形をなし、東側で6cm、西側では2~3cmと浅くローム層に掘りこむ窓穴住居址であるが、開窓時壁の大半は削りとられたものとみる。床面は堅く、主柱穴5ヶが壁に沿って配置されている。炉址は中心よりやや西に寄ってあり、径40cmの円形、深さ10cm

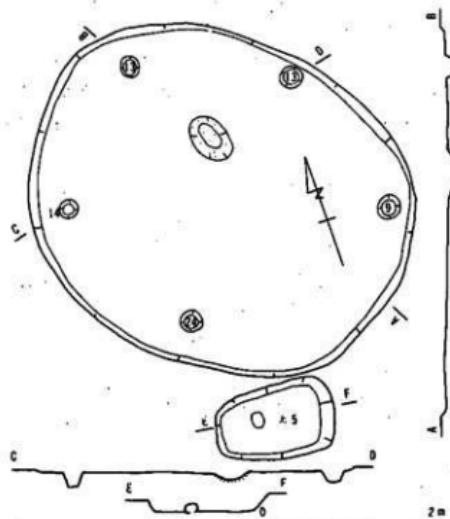


図29 天神遺跡6号住居址・土坑5号

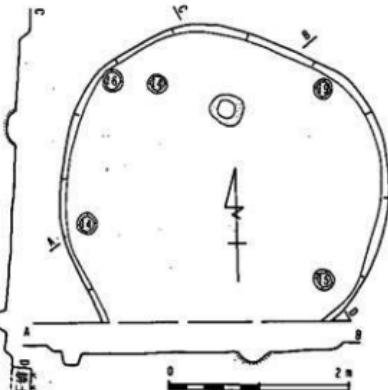


図30 天神遺跡7号住居址

の掘りこみの地床炉で、焼土は著しい。その東に炉址ともみられる2つの石を配す掘りこみがあり、灰はみられたが焼土は認められなかった。

遺物（図44の11・12）は僅少で土器斧ではなく、石器によって縄文後期とみたものである。11の磨石斧は基部を欠き凝灰岩製である。12の打石斧は硬砂岩製 335gを測る大形のもので、弥生時代の石鎌ともみられ、縄文後・晚期にみる石器である。これらの他に黒曜石片数点がある。

天神9号住居址（図33）

調査区域の西端部に発見され5号住居址の西南7.5mにある。径 南北4m 東西3.9mの円形をなし、壁の大半は削りとられ僅かに3~5cmローム層に掘りこむ堅穴住居址の痕跡を残すものである。床面の一部は荒れ残る面は堅く主柱穴5ヶ所が壁に沿って配置されている。炉址は中心より南西に片寄ってあり、35cm×32cmの隅丸方形をなし、深さ6cmの浅い掘りこみの地床炉である。

遺物（図44の23・24）は少なく、土器は無文の小片10数点があり、石器は23・24の凝灰岩製の刃部を欠く打石斧がある。

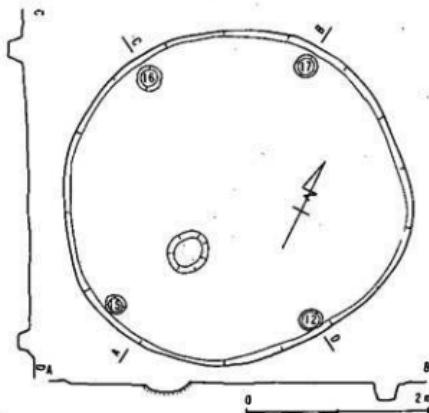


図31 天神遺跡8号住居址

2. 土 坑

土坑は1号~8号が調査され、その分布は1号住居址の南東に1・2号、3号住居址の北に3・4号、6号住居址の西に6・7号、6・7号住居址の間に5・8号土坑があつて2土坑ずつが並ぶ状態にある。明らかに土壠といいきれるものはない。以上の土坑を次の一覧表（表4）にまとめた。

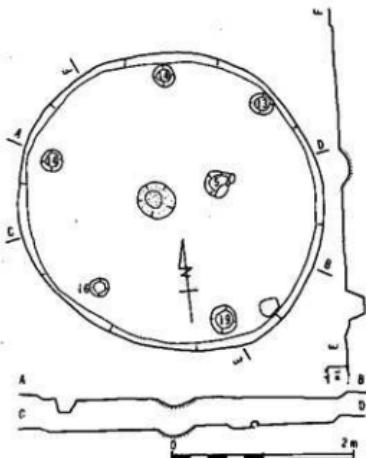


図32 天神遺跡5号住居址

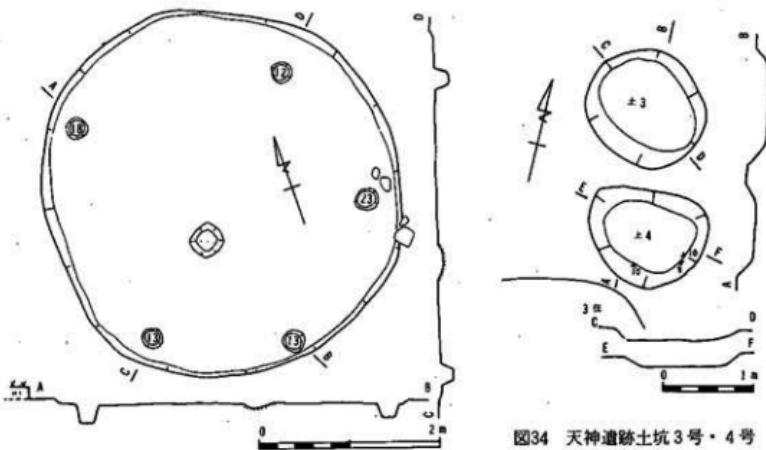


図33 天神遺跡9号住居址

図34 天神遺跡土坑3号・4号

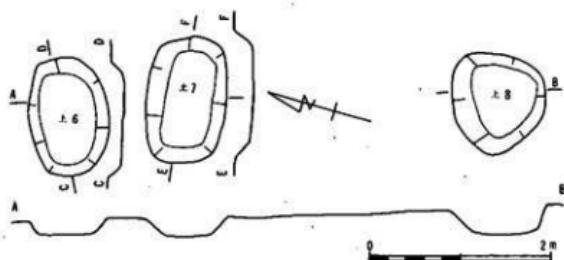


図35 天神遺跡土坑6号・7号・8号

天神遺跡土坑一覧表（表4）

土坑 No.	図 No.	大きさ(cm) 南北・東西	深さ (cm)	形 状	主軸方向	遺 物	備 考	時 期	遺 物 図44の
1	25	80×120	18	椭 圆 形	N 55° E	勝板式土器片 石錐 1		縄文 中期中葉	25~27
2	"	80×130	15	"	N 26° E		底部に小疊	" ?	
3	34	120×135	20	"	N 54° W			不 明	
4	"	108×132	17	"	N 76° W	縄文後期 土器底部		縄文後期	29
5		80×133	20	隅丸長方形	N 78° W	石錐 1	底部に石 1 こを置く	" 中期 ?	28
6		78×130	17	椭 圆 形	N 70° E			不 明	
7		87×140	21	隅丸長方形	N 84° E			"	
8		110×110	30	隅丸三角形	N 20° W			"	

IV ま と め

中尾遺跡は境ノ沢の崖端浸蝕が中央部に入りこんでいるため北側を大中尾、南側を中尾と細分されているが、同一段丘面にあり、一般的に中尾と呼ばれており、同一遺跡としてとらえ中尾遺跡と総称することにした。

大中尾地域東側は大原段丘の崖錐堆積地帯となり遺物の発見はなく、遺物の採集された台地北西側に調査重点地区として調査をすすめた。中尾地域はかねて遺物の採集をみた地点は現在乳牛団地となり、工事中全面にわたってバトロールを実施したが遺構・遺物の発見はなかった。

大中尾の地形は扇状地形をなし、東側は崖錐堆積のため傾斜は強く、西にいくに従い緩傾斜となって段丘となるが、そのため上層の土の流失が多いとみられ、表土は浅く20cm以下でローム層となっている。開墾時や耕作によって住居址の壁の大半は削りとられており、遺物の出土は僅少である。畑の境にある石塚は開墾時・耕作によって出た石の捨場であり、ここより多くの石器が採集されている。これより見て遺構の破壊は多く、遺物の大半は散逸したものである。

中尾遺跡で発掘調査した住居址は縄文早期4と縄文晚期12である。早期末の土器は所謂「細線文指圧痕薄手土器」が主体となり、石器には石鏃・石匙・石錐があり、隣接する伊久間原遺跡群の早期末と時間的差はみられない。

縄文晚期の土器は条痕文土器のみで、器形を知ることのできるのは16号住居址出土の2個体であり、單方向条痕文をもつもので、晚期後半とみる。伊久間原遺跡では晚期住居址は集落の中心地帯にもみられたが、多くは北と西の段丘縁部に発見されており、伊久間原とは東側の崖錐地帯は地続きとなっており、中尾遺構群は伊久間原遺の一環として把うべきものと考えたい。

中尾遺跡には、伊久間原遺跡の主体をなす縄文中期の住居址の発見はない。縄文中期の大集落形成期の立地条件と集落共存のためのナワバリ的な社会制約が考えさせられる。弥生時代・古墳時代から歴史時代の遺構の存在はなく、この地の立地が、これら時代の農耕条件の適地でなかったものと受けとめられる。縄文早期の末発達期、下伊那地方における縄文後・晚期における遺跡の減少と、集落の縮小・分散期における伊久間原遺跡との関連も考えねばならぬ問題と思われる。

中尾遺跡で発見された2焼土帯は、その形態・灰の深い堆積・焼土の顕著さ等からみて近世・近代におけるホロ炭焼跡ではない。周辺から黒曜石片数点がみられた以外出土遺物はなく、1号が縄文早期末7号住居址を切っており、それ以後とわかるが、時期・性格について知る手掛りはない。その状態からみて長時間にわたって焚火が行われていたことは確である。周辺の遺構からみて縄文晚期における何らかの遺構とも考えられるが不明である。

天神遺跡で発掘調査された住居址は段丘西端部に縄文中期勝板式一間訪地方編年では藤内期に比定される住居址7と縄文後期とみる住居址2である。遺跡の中心とみられる地域の大半は遺物の散布をかねてからみたが、昭和初期に桑園の天地替しが行われており、グリッド調査結果遺構が完全に破壊されていることがわかった。

遺跡の表土は中尾遺跡と同様浅く、12~20cmでローム層となっている。このため開墾時や耕作によって住居址の壁の大半は削りとられ、遺物の散逸も大きく、その出土量は僅少であった。

天神遺跡は伊久間原遺跡とは深い境ノ沢の浸蝕谷に隔てられ、中尾遺跡より一段下位段丘面にあり伊久間原下原と同位面にある。ここに縄文中期中葉の集落の存在が確かめられた。この期における伊久間原遺跡での遺構・遺物の発見は僅かであり、中期中葉末にいたって集落の展開がみられている。下伊那地方においては中期前半の遺跡は比較的少なく、その規模も小さく、その期における集落形成の条件、集落の移動等に関しては今後の研究課題である。縄文後・晚期の小集落が、伊久間原・大中尾・天神の段丘縁部に散在して立地することについても、中期後半の大集落のあり方と大きな差がみられ、この期の立地条件を示すものといえよう。

注1 佐藤「伊久間原」 棚木村教育委員会 1978.3

〃 「伊久間原Ⅱ」 * 1980.2

注2 注1と同じ

おわりに、今次調査にあたって長野県南信土地改良事務所の深い御理解があり、土地所有者代表の虎岩原畑組合長片桐与一氏には終始御協力を得、嚴寒のさ中、また遺跡への悪路を通われ、作業にあたられた方々の献身的なご協力、お骨折りのあったことを深謝したい。
(佐藤 駿信)



图36 中尾・天神遺跡出土小型遺物(1:3)

1~4…中尾2住，5~11…中尾4住，12…中尾3住，13~19…中尾6住，20…中尾7住，
21…中尾12住，22…中尾14住，23…中尾洞3，24…天神2住，25…天神4住。

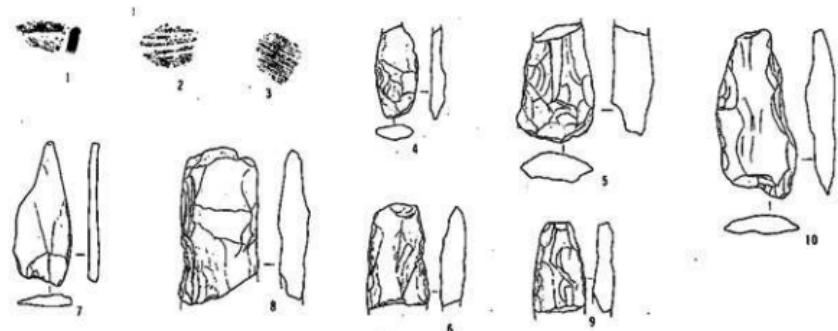


图37 中尾2号住居址出土遗物 (1 : 4)

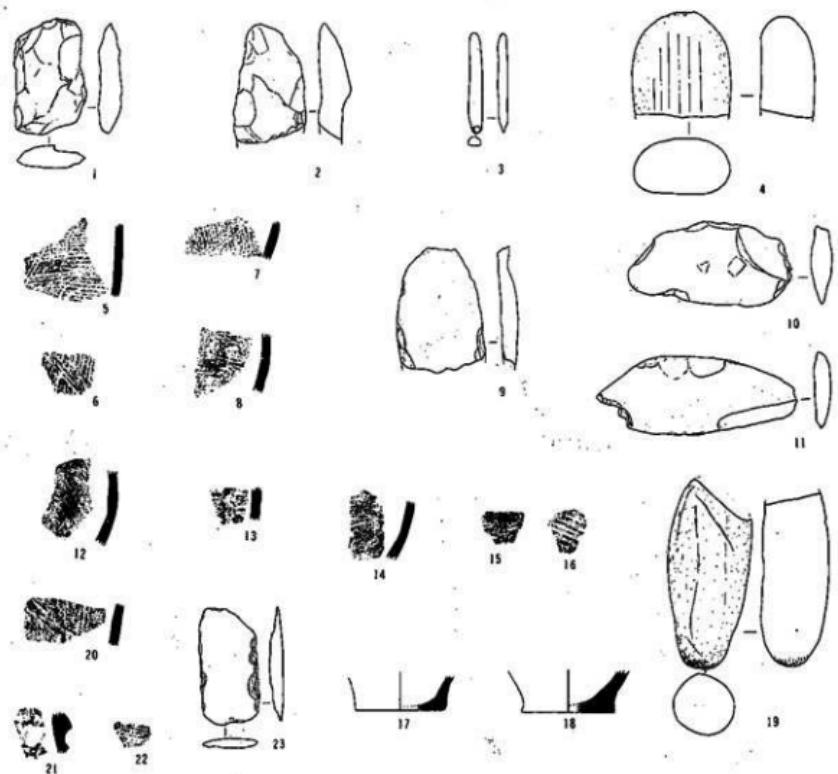


图38 中尾遗跡5号·9号·10号·12号·13号·15号住居址出土遗物 (1 : 4)

1~4···5住, 5~11···9住, 12~13···10住, 14~19···12住, 20~13住, 21~23···15住。

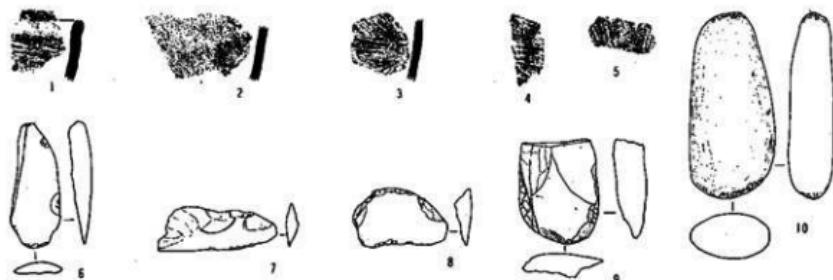


图39 中尾遗址14号·16号住居址出土遗物 (1 : 4)

1 ~ 10 ··· 14住, 11 ~ 12 ··· 16住

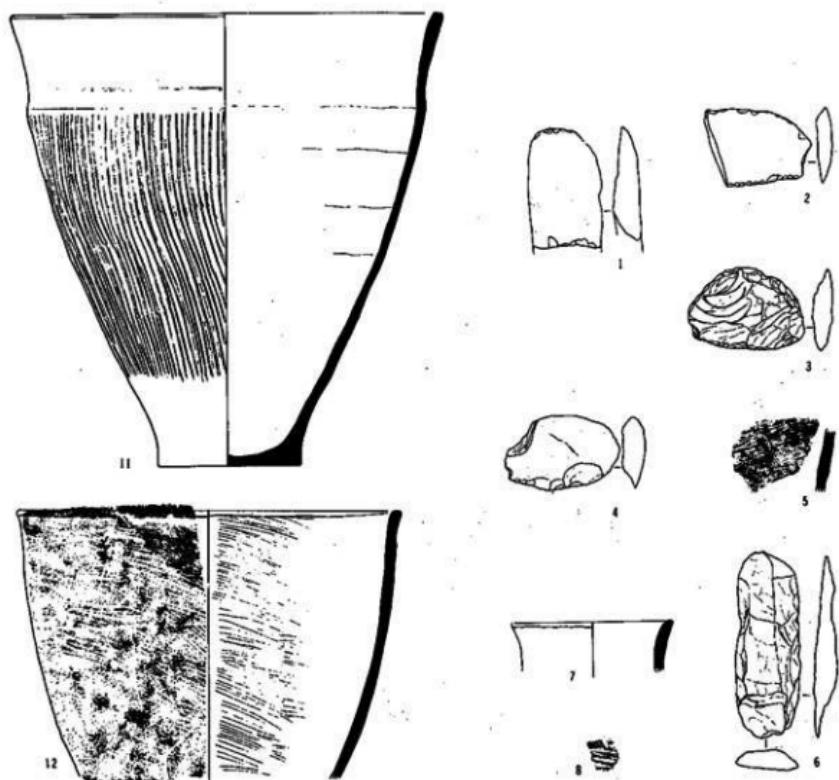


图40 中尾遗址3号·6号·7号·8号·9号出土遗物 (1 : 4)

1 ~ 3 ··· 土3, 4 ··· 土6, 5 ··· 土7, 6 ··· 土8, 7 ~ 8 ··· 土9,

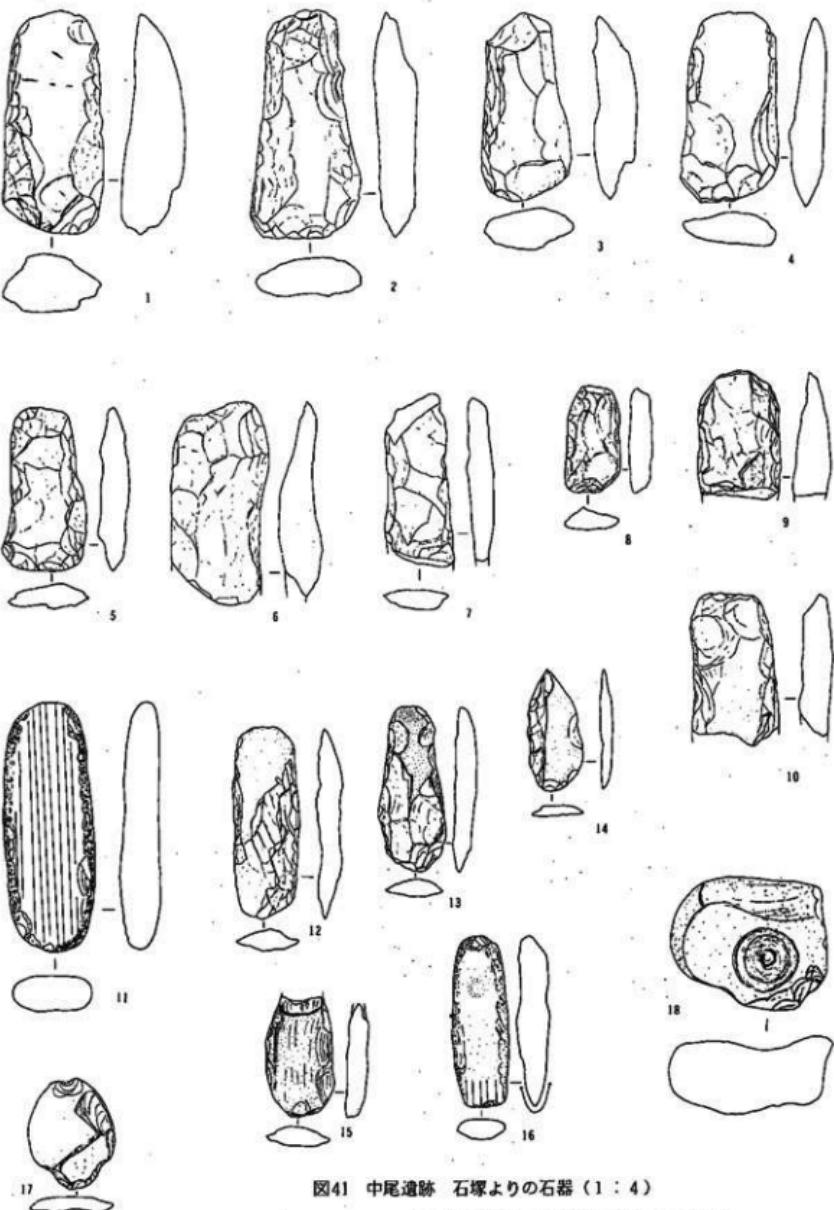


図41 中尾遺跡 石塚よりの石器 (1:4)

1~10…細砂岩, 11~17…凝灰岩, 18…花崗岩

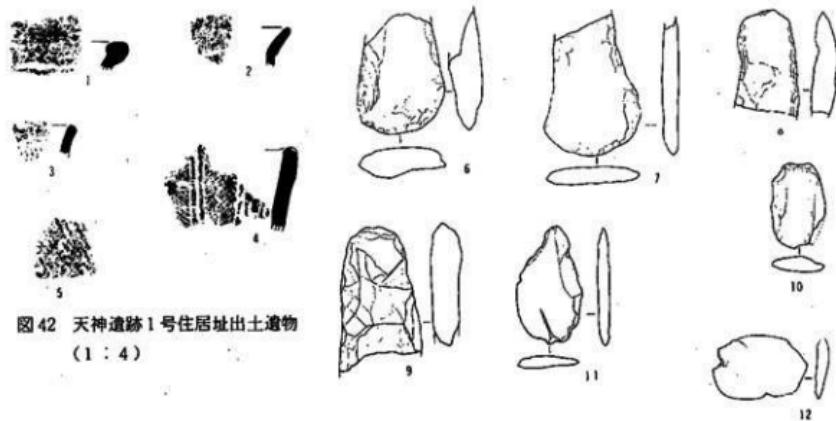


図42 天神遺跡1号住居址出土遺物
(1:4)

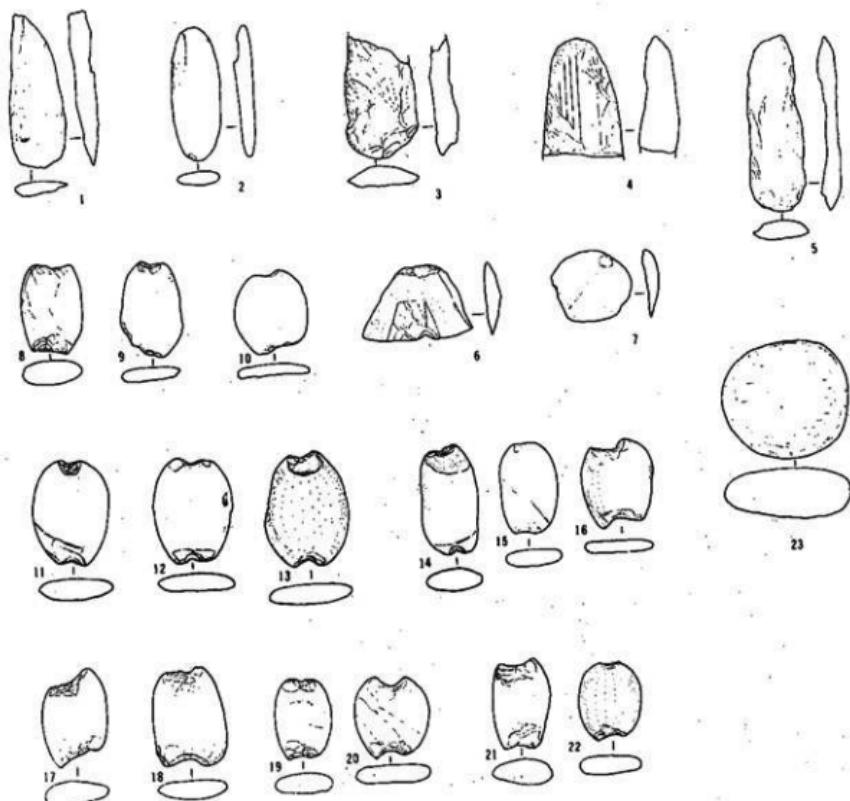


図43 天神遺跡2号住居址出土遺物 (1:4)

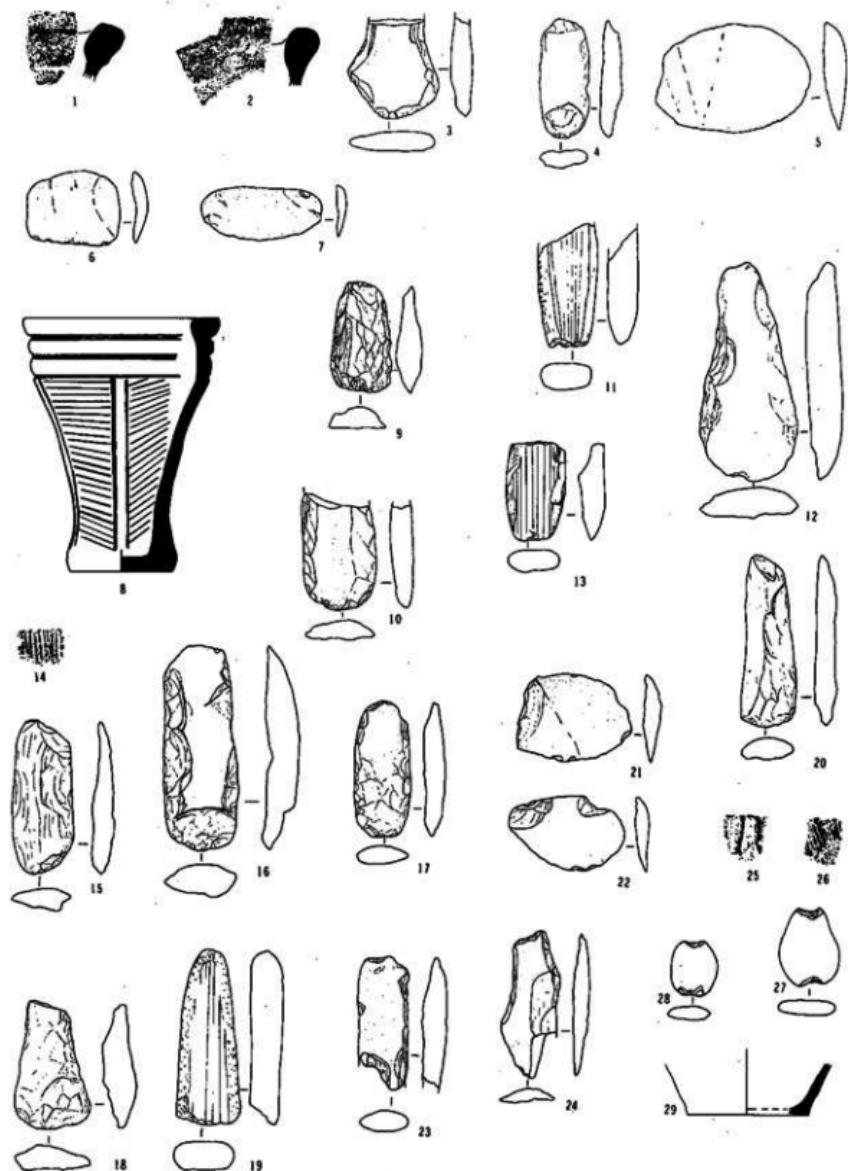


图44 天神遗址3号·4号·5号·6号·7号·8号·9号住居址，土坑1号·4号·5号出土遗物(1:4)

1~7···3件，8~10···4件，11~12···5件，13···6件，14~19···7件，

20~22···8件，23~24···9件，25~27···±1，28···±5，29···±4。



図版 I 中尾遺跡



中尾遺跡



中尾遺跡中央部の段丘端部が発掘地
谷を隔てた段丘面が伊久間原遺跡



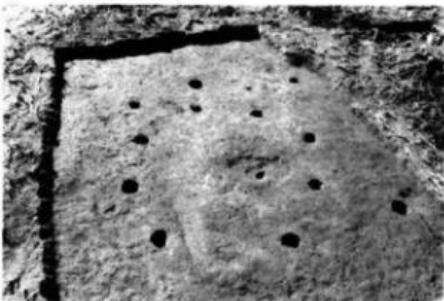
中尾遺跡近景 - 北西より、上位段丘が大原



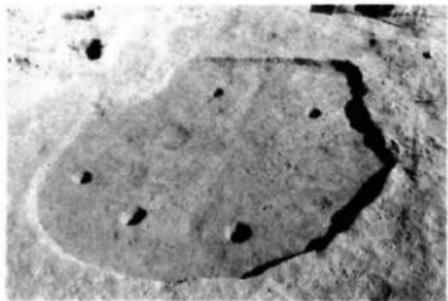
中尾遺跡遺構群 - 北より



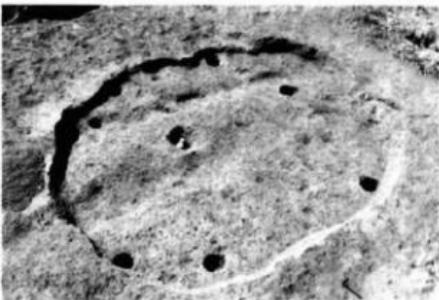
中尾遺跡遺構群 - 東より



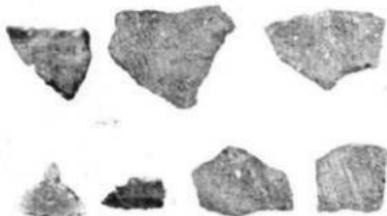
中尾1号住居址



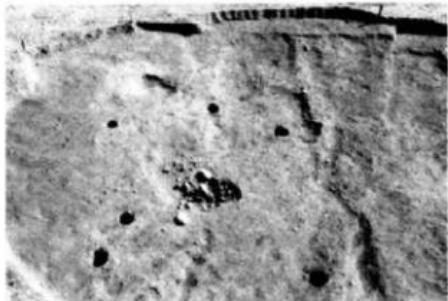
中尾3号住居址



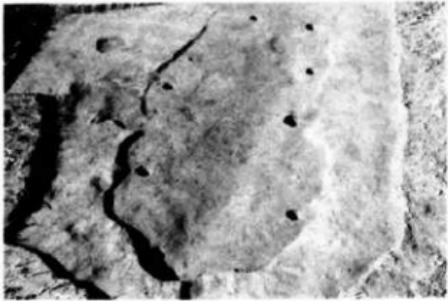
中尾4号住居址



中尾4号住居址出土遗物



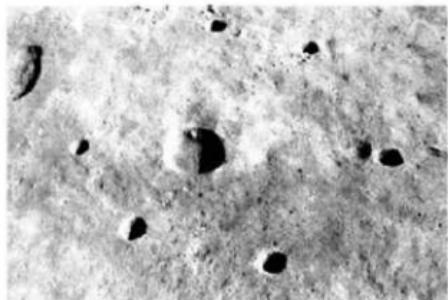
中尾2号住居址



中尾6号住居址



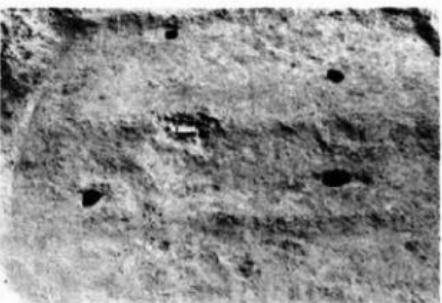
中尾14号住居址



中尾9号住居址・土坑8号（左はし）



中尾10号住居址・土坑6号（上左）・7号（上右）



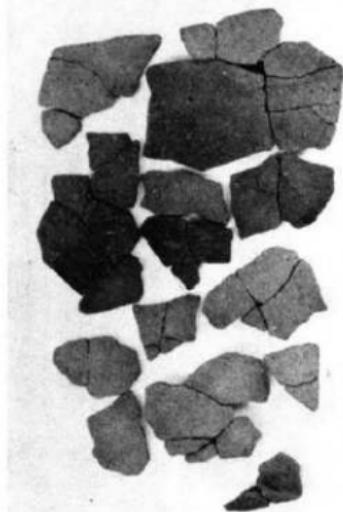
中尾16号住居址



中尾16号住居址炉址内土器出土状况



中尾16号住居址出土土器



中尾16号住居址出土土器



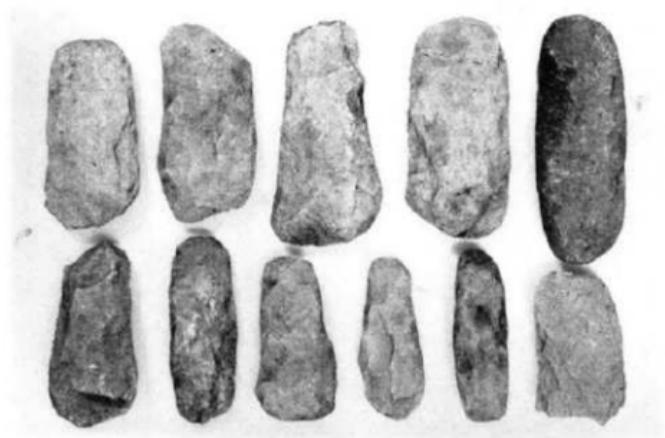
中尾焼土帯Ⅰ，7号住居址を切っている



中尾焼土帯Ⅱ



中尾土坑2号（上）・3号（下）



中尾石塚採集石器

図版 II 天神遺跡



天神遺跡全景



天神遺跡近景



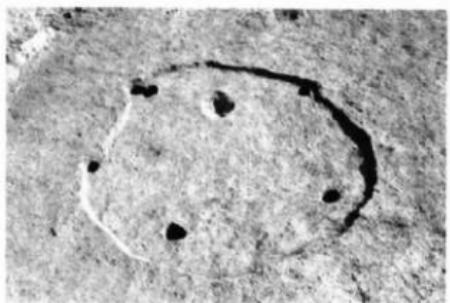
天神遺構群 - 北より



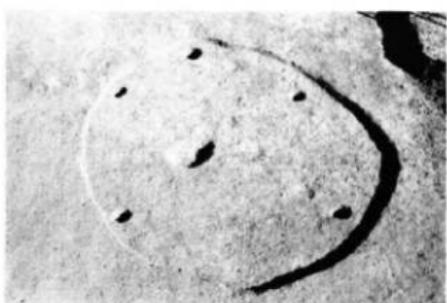
天神遺構群 - 南より



天神遺構群 - 下より 4号・3号・2号・1号住居址



天神 1 号住居址



天神 2 号住居址



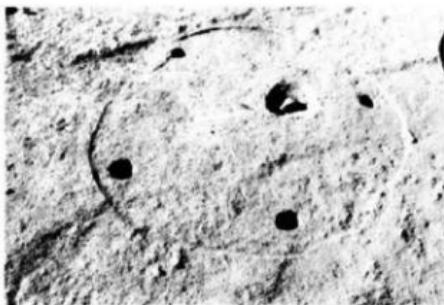
天神 2 号住居址出土石鏟



天神 2 号住居址石鏟出土状况



天神 2 号（上段）・7 号（下段）住居址出土石器



天神 4 号住居址



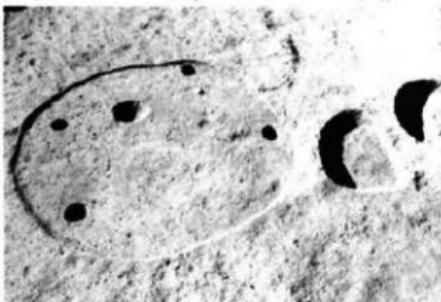
天神 4 号住居址炉址内土器出土状况



天神 4 号住居址炉址内出土土器



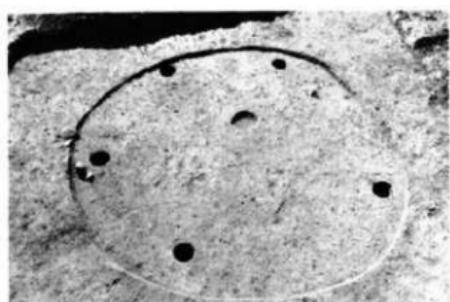
天神 4 号住居址炉址内出土土器（復元後）



天神 3 号住居址，土坑 4 号・3 号（右端）



天神 6 号住居址，土坑 5 号（上）・6 号（下段右）・7 号（下段左）



天神 9 号住居址

図版 III 発掘スナップ



中尾遺跡調査をはじめる



中尾遺跡調査はすすむ



中尾遺跡調査はすすむ



中尾遺跡 4号住居址調査



天神遺跡調査はじめる



天神遺跡段丘端部へと調査拡張



図45 小林神社前遺跡地形詳図 (1:10,000) (ワク内調査区域)

付 小林神社前遺跡立合調査報告

飯田市下久堅小林神社前遺跡は飯田市下久堅小林に所在する。遺跡の北は知久沢川に面し、東西300m西端部で100m、東にいくに従い狭ばまり、三角形をなす平坦な段丘面で標高460mを測る。西は小段丘崖をもつて小さな低位段丘面となる。南は小林丘陵地帯から下がる急峻な崖によって阻ばれ、その丘陵の先端部の標高490m

に中世知久氏の支城

小林城跡がある。

遺跡は中世和鏡の出土をみており、小林城跡との関連において注目されているところである。

(図45)

小林神社前遺跡一帯に烟灌水工事が昭和54年度事業として行われることになり台地全面の配管区域の立合調査を実施したのが今次調査である。

立合調査によって確認された遺構は次

のようである。(図46)

住居址 6. 一古墳時代後半 5. 中世1(2号住居址)

溝 壴 1. 一中世とみるが、性格の把握にいたらなかった。

古墳時代後半の住居址は1号住居址は配管工事がカマドをきり、このため遺物の出土は多く、土器器の壺・高杯があり鬼高II式である。(図47) 3号・4号・5号・6号は土師片を僅かに検出したにすぎないが、1号住居址と同時期とみられる。1辺が4~5mの方形をなすとみられ、表土下50cm前後にある竪突住居址である。中世2号住居址は1辺が10m余とみられ、中央部に礫を敷くもので、小林城跡と関連するものとみられる。

(佐藤 駿信)

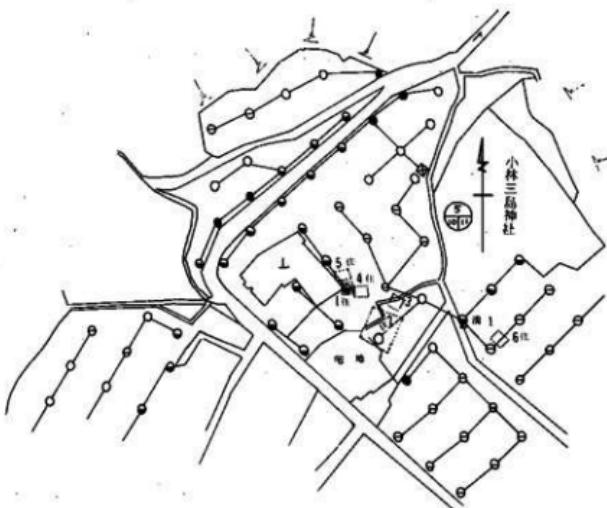


図46 小林神社前遺跡立合調査検出遺構図 (1 : 2,000)

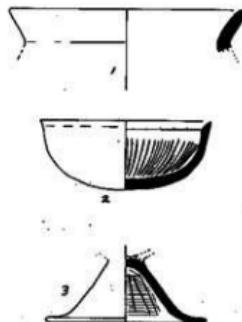


図47 小林神社前遺跡1号住居址出土遺物

調査組織

1. 中尾・天神遺跡埋蔵文化財発掘調査委員会

勝野 好一	飯田市教育委員会委員長
沢柳 俊夫	飯田市教育委員
大田中 一郎	"
松島 勝郎	"
林 研二	飯田市教育長
山下 昊平	飯田市教育委員会事務局社会教育課長

2. 調査団

団長 佐藤 雄信

3. 指導者

大沢 和夫	飯田女子短大教授
関 好一	県文化課指導主事

4. 事務局

飯田市教育委員会社会教育課			
山下 昊平	社会教育課長		
竹村 宗丘	課長補佐、文化係長		
代田 一行	主事		
熊谷 理恵子	"		

5. 作業員

福島 明夫	北村 重実	中平 兼茂	吉沢 徳男
牧内 住子	佐藤 いなゑ	下平 亮	桐生 よしあ
藤本 徳男	桐生 うめ	平沢 俊恵	大平 豊子
柳沢 八重子	下平 順枝	田口 さなゑ	吉川 弥生

お わ り に

昭和54年度県営畠地帯総合土地改良事業計画（農道開発、圃場整備等）が小渋地区、大原北原工区で実施されることになった。

先年の53年度事業として飯田市教育委員会が調査した大原遺跡の調査で縄文早期及び中期中葉の住居址と遺物及び土坑、集石炉等が検出されたが、54年度実施される工区も立地条件が非常に類似していることにより、遺跡の所在が推測された。このため県教育委員会と事業者の南信土地改良事務所と飯田市教育委員会とは事前に協議をするとともに、11月に一帯の表面採集を行った結果遺物の散布をみたので、調査区域の決定などを行い埋蔵文化財発掘調査記録保存事業に着手した。

今回の発掘調査の遺跡名は中尾・天神であり、小林神社前遺跡は畠灌水工事に伴う立合調査とした。

埋蔵文化財発掘調査事業費は4,000,000円で、中尾・天神遺跡が3,970,000円、小林地籍が3000円である。

調査費用のうち地元負担分の1,000,000円は国庫補助事業として、その内訳は国庫補助金が500,000円、県費補助金150,000円、市負担分350,000円で他は全額南信土地改良事務所の負担金とし、飯田市とが発掘調査委託契約を行い飯田市教育委員会の直轄事業として実施した。

この調査用地は耕地であるため秋の収穫が終った11月初旬から行われ、1月末日まで約60日間を費して行われたが、これにあたって地権者の快諾もいただき土地所有者、事業担当事務所の方々格別な理解と援助御指導によって計画した面積の調査が順調に進み貴重な遺構や資料が検出されて大きな成果のうちに完了したことは感謝にたえない。

調査体制は団長に佐藤赳信先生をお願いし、飯田女子短期大学の大沢和夫先生、県教育委員会文化課指導主任関好一先生には全般について適切な助言をいただいた。報告書の作成執筆は団長の佐藤先生が終始熱意をもって当られ、ここに完了したことに対し深く敬意を表します。

昭和55年3月

飯田市教育委員会社会教育課

中尾・天神遺跡

埋蔵文化財発掘調査報告書

- 1980.3 -

長野県南信土地改良事務所
長野県飯田市教育委員会

印刷株式会社秀文社
